

令和元年度

西濃学園教育報告書

不登校特例校が拓く日本の教育



学校法人西濃学園

目次

はじめに	1
2019年度報告会プログラム	2
不登校の現状と不登校特例校について	
文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長 松木秀彰氏	3
＜不登校特例校 3 校の実践報告＞	
星槎中学校実践報告 蓮田亮大先生	8
京都市立洛友中学校報告 西本幸史先生	13
西濃学園中学校報告 太田宣子スクールカウンセラー	17
少年の主張西濃学園中学校 3 年 池田翠さん	22
不登校特例校シンポジウム	28

はじめに

学園長 北 浦 茂

全国 12 校の不登校特例校が岐阜県揖斐川町に集い、約 400 名の方々にご参加いただき、3 校の取り組みの発表、そして文部科学省をはじめとしてすべての学校のパネル発表を開催することがで



きました。参加者の方々は議員さん、教育長さん、教育委員会の方、公立・私立の先生方、地域の区長さん、公民館館長さんそして主事さん、青少年育成委員の方々と多様なみなさまにお集まり頂くことができました。このような会を文部科学省の共催で開催できましたことは、登校しようと思ってもできないことで悩んでいる子ども達の自立の向上のスキルに繋がり、多くの悩める子ども達の笑顔を作り出す大きな第一歩を踏み出すことができたと思っております。

不登校特例校は文部科学大臣の指定を受け、柔軟なカリキュラムで学校に行きたいという児童・生徒を育てていく一つの方法です。3 校の発表と 12 校のパネル発表でそれぞれの学校の教育実践を紹介していただき、各々の教育の特色を知り、考えを深めることができこの会の初期の目的が達せられたと思います。

また、会の開催日の前日、司会者の嶋野道弘先生、コメンテーターの松本秀彰氏、江口昇勇先生、古田信宏先生のご参加をいただき特例校の各々の出席者による打ち合わせと今後の進め方について話し合うことができました。話し合いでは特例校が集まり各校の取り組みを学習する機会は大変重要で、できれば 12 校の持ち回りで続けていければという意見と共に学会のような組織を創り教育実践を高めていこうという意見も出されました。先ずは令和 2 年度は東京シユーレ葛飾中学校の奥地圭子先生が文部科学省と共に令和 3 年 1 月 19 日東京で予定していただけることになりました。

不登校生が増加の傾向の中で不登校特例校の指定を考えている団体が増えていくと聞き及んでおります。現在の 12 校が中心となり新しく指定された学校と共に手を携えて不登校生の自立に貢献できるような連絡協議会を創立し、一人でも多くの悩める子ども達の笑顔が得られるよう努力してまいりたいとこの会を終えて決意を新たにしております。

最後に開催にあたりまして多くの方々のお力添えを賜り大きな成果を上げることができましたことを深く感謝いたしております。

不登校特例校が拓く日本の教育

2019 年 11 月 22 日（金） 13：00～16：30

於：谷汲サンサンホール

主催：学校法人西濃学園

共催：文部科学省

後援：岐阜県教育委員会/揖斐川町教育委員会

岐阜県私立中学高等学校学校協会/公益法人田口福寿会

前半

13：00～13：10 開会の挨拶など

13：10～13：20 不登校の現状と不登校特例校について

文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長 松木秀彰氏

<不登校特例校 3 校の実践報告>

13：20～13：35 星槎中学校実践報告 蓮田亮大先生

13：35～13：50 京都市立洛友中学校報告 西本幸史先生

13：50～14：10 西濃学園中学校報告 太田宣子スクールカウンセラー

西濃学園中学校 3 年 池田翠さん

休憩とポスター発表

14：10～14：40 ホールと展示コーナーにて、

文部科学省と不登校特例校全 12 校のポスター発表

後半

14：40～16：15 不登校特例校シンポジウム

司会：嶋野道弘先生（元文教大学教育学部教授）

コメンテーター：加藤諦三先生（作家・早稲田大学名誉教授）

松木秀彰氏（文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長）

江口昇勇先生（日本福祉大学スポーツ科学部教授）

古田信宏先生（岐阜大学特任教授・日本学校教育相談学会岐阜県支部理事長）

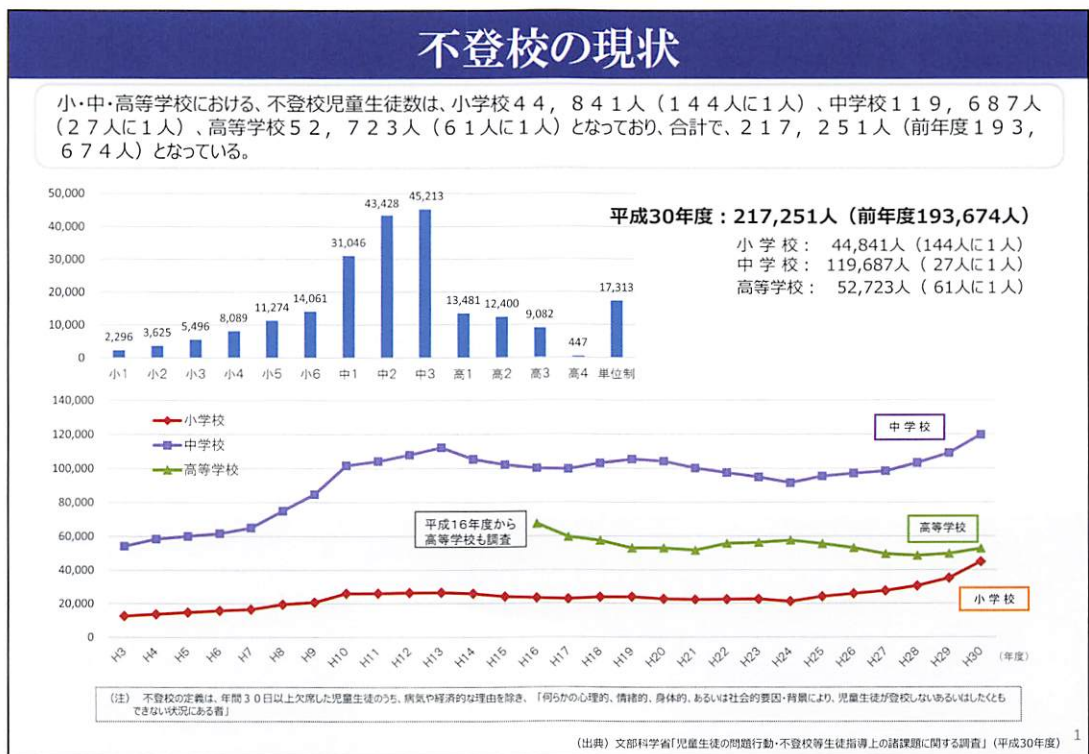
16：15～16：30 閉会の挨拶など

不登校の現状と不登校特例校について

文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長

松 木 秀 彰 氏

みなさん、こんにちは。文部科学省児童生徒課指導室長をしております松木秀彰と申します。わたくしから、不登校の現状と不登校特例校について話をさせていただきたいと思います。まず、データでございますけれども、毎年度、文部科学省ではいじめその他の問題行動や、不登校に関するデータを統計で取っておりまして、公表しております。



この最新データのご紹介ですけれども、不登校の現状といたしまして、小・中・高のデータ合わせると平成30年度で21万7251人の不登校児童生徒がいたということになります。前年度が、19万3674人ということでございまして、小・中・高と見ますと小学校が4万4812人、中学校が11万6987人、高等学校が5万2727人となっております。特に多いのが中学校でございまして、割り算をいたしますと27人に1人が不登校になって、これはクラスに一人いる、とことになります。不登校の統計上の定義は、年間30日以上、怪我とか入院とかそういうものを除いて、年間30日以上連続でも、連続していなくてもいいんですけれども、学校を欠席した子どもを不登校と定義しておりますが、そういった定義に沿いまして数字を出すとこれだけの数になると。特に、中学校が目立ちますが、小学校も実は大きく伸びておりまして、29年度が3万5千人だったのが4万4800人となって、小学校が1万

人増えている、ということでございます。この小学校における大幅な伸びもこの30年度の大きな特徴でございました。また、今日お配りしていますパンフレットの方には書いておりますけれども、6割近くの子どもは年間90日以上不登校になっているというデータがございます。こういった状況が見られるといったことでございます。

この要因について調べますと、小・中トータルで多いのが家庭に関わる状況で37.6%でございます。それから、友人関係の悩みというのが27.8%、学業不振が21.6%で、この三つが非常に高くなっているということでございます。特に、学業不振とか、友人関係の悩みは小学校よりも中学校の方が大きくなっているというデータにもなっております。中学校というのが非常に難しい時期になっているということができるとおもいます。

こういった不登校の対策のうちの一つとして、今日のメインテーマになります不登校特例校がございます。これは、もともとは特区制度で教育課程の弾力化を増したものが平成16年にありましたけれども、これがきっかけとなっております。平成17年に、制度化をしているということでございます。これは、不登校の子どものために、特別の教育課程を編成することを認める、という制度になっています。これによって認められているのが、現在12校あるわけでございますけれども、八王子市立高尾山学園小学部・中学部からはじまって、調布市立第七中学校はしうち教室まで全部で12校あります。西濃学園中学校が平成29年4月開校となっておりますが、平成29年4月から不登校特例校としてスタートしたということでございます。現在12校あるということでございます。

そして、不登校児童生徒に対する支援ということでは、従来からの取り組みとして、スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーの充実などと併せて、不登校特例校



という取り組みをしていたというわけでございます。平成 17 年からでございます。ところが、その後、不登校の子どもが、特に平成 24 年からまたずっと伸び始めております。そういった事情もありまして、議員立法で、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会確保に関する法律」というものができました。これが平成 28 年の 12 月でございます。それに先立って、有識者会議も立ち上げて、いろいろ議論をしているという動きがあります。その後、いろいろ施策を充実させていく流れになっておりまして、魅力ある学校づくりとか、児童生徒支援シートを使用した子どもの状況の情報共有の取り組みを進めるといったこと、それから不登校児童生徒に対する多様で適切な教育機会の確保のためにですね、また最後で詳しく説明いたしますけれども、新たに不登校児童生徒に対する支援推進事業の予算要求もしている、といったようなところで、各種施策を充実させておりますけれども、特例校についても引き続き、これを推進していくという流れになっております。

こちらが(以下)、先ほど申し上げました平成 28 年の 12 月にできた法律の概要でございます。目的として、教育基本法や児童の権利条約の趣旨にのっとって不登校児童生徒の教育機会を総合的に確保しますということが書いてありまして、基本理念として不登校児童生徒が行う多様な学習活動の事情を踏まえた個々の状況に応じた必要な支援と、学校における環境の整備、といったようなものが掲げられております。

義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する基本指針（概要） （平成29年3月31日文部科学大臣決定）	
1. 教育機会の確保等に関する基本的事項	
○ 義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等の意義・現状 ○ 基本指針の位置付け ○ 基本的な考え方 ・ 不登校児童生徒等に対する教育機会の確保等 ◆ 魅力あるより良い学校づくりを目指すこと ◆ 不登校児童生徒の社会的自立を目指すこと ◆ 就学に課題を抱える外国人の子供に対する配慮が必要 ・ 夜間中等等における就学の機会の提供等 ・ 国、地方公共団体、民間の団体その他の関係者の相互の密接な連携の下で施策を実施	
◆ 不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮すること ◆ 不登校児童生徒の意思を十分に尊重しつつ、個々の児童生徒の状況に応じた支援を行うこと 等	
2. 不登校児童生徒等に対する教育機会の確保等に関する事項	
○ 児童生徒が安心して教育を受けられる魅力ある学校づくり ・ 魅力あるより良い学校づくり ・ いじめ、暴力行為、体罰等を許さない学校づくり ・ 児童生徒の学習状況等に応じた指導・配慮の実施 ○ 不登校児童生徒に対する効果的な支援の推進 ・ 個々の不登校児童生徒の状況に応じた支援の推進 ◆ 不登校児童生徒や保護者の意思を尊重しつつ、状況把握及び関係機関等との情報共有などの継続した組織的・計画的な支援の推進 等 ・ 不登校児童生徒に対する多様で適切な教育機会の確保 ◆ 不登校特例校・教育支援センターの設置促進、教育委員会・学校と民間団体の連携等による支援の推進、多様で適切な学習活動の重要性及び休養の必要性を踏まえた支援 等 ・ 不登校等に関する教育相談体制の充実 ◆ 教員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、関係機関が連携した体制構築の促進 等	
3. 夜間その他特別な時間において授業を行う学校における就学の機会の提供等に関する事項	
○ 夜間中等等の設置の促進等 ・ 設置の促進 ◆ ニーズの把握や設置に向けた準備の支援、法第15条に基づく協議会の設置・活用、広報活動の推進 ・ 既設の夜間中等等における教育活動の充実 ・ 自主夜間中学に係る取組 ○ 夜間中等等における多様な生徒の受入れ ・ 義務教育未修了者に加え、外国籍の者、入学希望既卒者、不登校となっている学齢生徒など、多様な生徒の受入れを図る	
4. その他教育機会の確保等に関する施策を総合的に推進するために必要な事項	
○ 調査研究等 ○ 人材の確保等 ○ 相談体制等の整備 ○ 国民の理解の増進 ○ 教材の提供その他の学習支援	

その中でも特に第三章のところですが、不登校児童生徒に対する教育機会の確保という章がございます。その中で、法律上も不登校特例校というものがはっきり位置付けられた、ということになっております。この法律に基づきまして、文部科学大臣決定でも、

基本方針というものを定めております。第一のところで、教育機会の確保ということに関する基本的事項として、右上の方にありますが、例えば不登校というだけで問題行動であると受け取られないように配慮すること、それから、不登校児童生徒の意思を十分に尊重しつつ個々の児童生徒の状況に応じた支援を行うことなどが定められております。また、不登校児童生徒の教育機会の確保に関する事項となりますが、その中でも不登校児童生徒に対する多様で適切な教育機関の確保として不登校特例校というものを明記させていただいております。われわれとしても不登校児童生徒のための不登校特例校というものが不登校対策として非常に重要なものであると位置づけております。この法律については、28年12月にかけて、3年見直しというのが定められておりました。3年経つと、31年の12月ですけれども、それに先立って去年の12月から見直しの検討をしているところでございます。その結果を、取りまとめというのが6月末でございますけれども、その中で実態調査なども行いまして、現状がどういうふうになっていて、どこに課題があるのか、それに対してどういう対策が必要かということも議論してまとめた、というところでございます。

教育機会確保法の施行状況に関する議論のとりまとめ【概要】

「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の附則の規定に基づき、平成30年12月から有識者会議において法律の施行状況についての検討を行い、令和元年6月にその議論をとりまとめた。不登校児童生徒等に対する教育機会の確保等に関する主なとりまとめの概要は以下のとおり。

主な現状・課題

- 小・中学校における不登校児童生徒数は、平成25年度以降5年連続で増加している。（小中合計：144,031人）
- 法や基本指針の内容が教職員に十分周知されておらず、その趣旨に基づく対応が徹底されていない。
→教職員に対し、研修を通じ法及び同法に基づく基本指針の趣旨等の周知徹底を行った教育委員会等：315（約16%）
- 特別に編成された教育課程に基づく教育を行う学校（不登校特例校）は全国に12校あり、このうち法成立後、新たに設置されたものは2校。（59の教育委員会等が設置を検討している）。
- 教育支援センターは全国に1,295箇所、約6割の自治体に設置されている。未設置の主な理由は「通所を希望する不登校の児童生徒が少なくない見込まれるため」「予算・場所の確保が困難なため」。
- 約15%の教育委員会等が不登校児童生徒の支援に当たり、民間の団体・施設と連携している。連携していない主な理由は「域内に民間の団体・施設がないため」や「不登校児童生徒が利用できる施設が他にあるため」。
- 法や基本指針の内容が児童生徒、保護者、地域の関係機関等に十分周知されていない。（法の趣旨を周知するため広報活動に取り組んだ教育委員会等は約5%）
- 約500の教育委員会等において、不登校児童生徒が多く在籍する小学校や中学校に対し、その支援のためのスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置を工夫している。
- 約60の教育委員会等で不登校児童生徒が学校外の機関等に通うための経済的支援を行っている。

主な対応の方向性

- 全ての教職員が法や基本指針の趣旨（不登校というだけで問題行動であると受け取れないよう配慮し、児童生徒の最善の利益を最優先に支援を行うことが重要であること等）を踏まえ、個々の不登校児童生徒の状況に応じた支援等を行うことができるよう、校内研修を始めとする教職員研修等を通じ、法や基本指針の理解を深めるとともに、民間の団体等と連携するなどして、多様な教育機会の確保等に資する実践について学ぶための方策を検討する。
- 不登校特例校の設置や取組事例等の周知、設置の申請に係る支援の強化など、設置促進に向けた方策を検討する。
- 教育支援センターが設置されていない自治体への設置を推進するほか、近隣の既設のセンターとの連携や複数の自治体による広域連携、公と民との連携、既存の公的施設の活用等によるセンターの設置等、学校外の公的機関による支援体制の整備を推進する。
- ICTを活用した学習機会の提供、訪問型支援、保護者や学校の教職員へのコンサルテーションなど、支援の中核としての教育支援センターの機能強化を図るほか、地域の大学等の教育機関を含め関係機関と連携した支援体制の構築を推進する。
- 教育委員会等と民間の団体・施設の連携推進に向けた方策を検討する。
- 不登校児童生徒の実態や要因等に関する調査研究について検討する。
- 学校において、不登校児童生徒の個々の状況に応じ、関係機関と連携した支援を行うことができるようチーム学校を一層充実させるため、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの配置を推進する。
- 多様な教育機会の確保のために必要な経済的支援の方策について、現行制度の活用も含め、引き続き検討する。

3

このまとめの中で、これ、30年の12月くらいの時点で各教育委員会にも実態調査をかけたわけですが、黄色マーカーで示しているところですね、不登校特例校は12校あります、と。その下に59の教育委員会が設置を検討しています、と。12校現在あるわけですが、不登校特例校の整備を考えています、検討しています、というご回答が実は59の教育委員会等から頂いたということで、非常に関心が高まっているな、というふうに今、感じているところでございます。こうした関心の高まりを受けて、引き続き、この不登校特

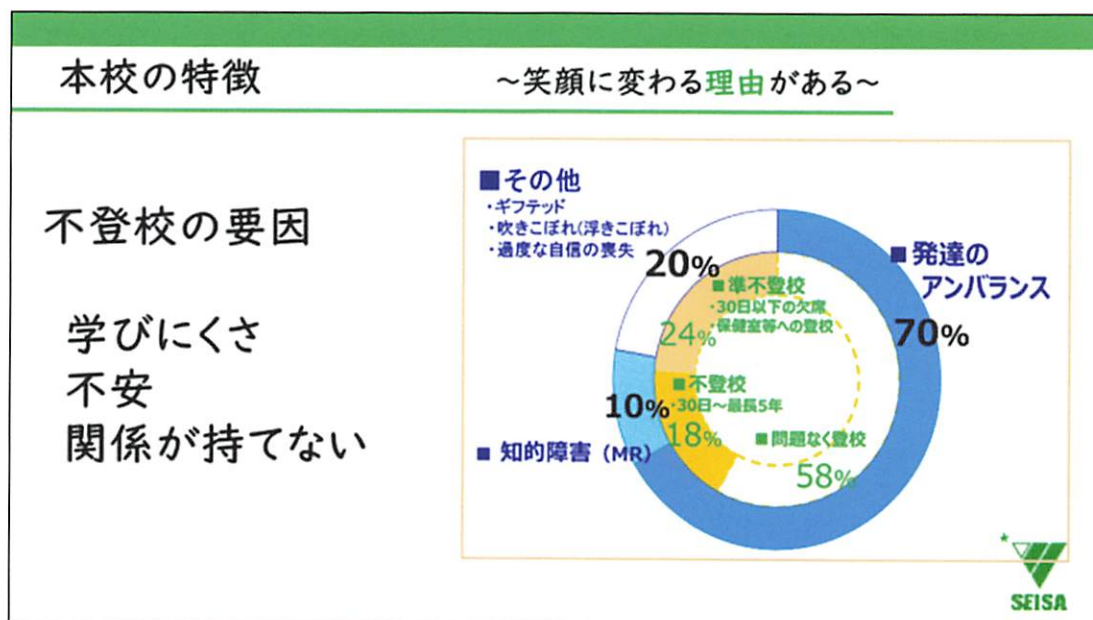
例校制度というものを充実させていきたいと考えております。

これが最後になりますけれども、途中でちょっと出てきました不登校児童生徒に対する支援推進事業の予算要求でございます。今まさに要求しているところでございますけれども、不登校児童生徒に対する支援体制の整備推進ということで関係機関間の連携を促進する、あるいは、学校以外の場における不登校児童生徒の支援を推進するための予算をトータルで2億1千2百万円の要求しているというところであります。それから調査研究でございますが、子どもたちに今何が起こっているか、ということですが、正直、まだ深堀りできていないというふうに思っておりまして、様々な悩みが複雑化しているな、深刻化しているなというところは見えるんですが、ここ、特に小中学校でも6年連続増加というこの現象の背景になにがあるかといったことも非常に深堀りが必要かなというふうに思っております。そのための調査研究も行いたいというふうに思っております。以上、わたくしからの説明を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

星 槎 中 学 校 実 践 報 告

蓮 田 亮 大 先生

私たちの星槎中学校は、横浜にごさいますて、それぞれ様々な特徴のある子どもたちが通っております。一見すると、何も課題がない、そんな笑顔が多くある学校です。その子どもたちの背景としましては、小学校時分に不登校を経験した、あるいは準不登校、そういった子どもたちがおります。先ほど松木様の方からご紹介がありました、不登校の要因たるものですが、学びにくさであるとか、不安、あるいは人間関係の構築が難しい、こういったところが大きな要因として挙げられていました。



私たち星槎では、さらに不登校の要因の要因となるものを探し、教育活動を進めてまいりました。やはり子どもたちにはそれぞれペースがあり、特徴があります。その学年にそのことを行わなければいけない、それを学ばなくてはいけないというのに、果たしてすべての子どもたちが合致したペースで学校に通えるかというとそうではありません。ですので、その子どもたちの特徴をしっかりとつかみながら教育を推進していくということで、学校教育を進めております。今回不登校特例制度ということで、さまざまな特徴をご紹介していきたいんですが、「習熟度別のクラス編成」であるとか、「TT 制」あるいは「教科書を使わずにワークシート」をすべて使っていて、その中に合理的配慮を様々散りばめていくですとか。コミュニケーションに関わる課題も多いので、「SST を授業として実施」していたり、それまでのつまづきを「ベーシックという授業で補完」したり、様々な取り組みがございます。その中でも本日ご紹介してまいりますのは、個別指導計画(IEP)についてというところになります。本校では在籍しております244名全員に対して、個別指導計画(IEP)なるも

のを作成しております。これはその子どもたちの学習の課題、あるいは対人の課題、それから得意なことを目標立てて、それに対して、われわれが専門的なアプローチで、どのように支援、あるいは携わっていくかというものを示したものです。これを作成するに当たっては客観的な尺度としまして、心理検査を活用します。また、行動観察を年度当初に行いますので、それらをもとに子どもたちの特徴、学びやすさですね、あるいは過ごしやすさ、あるいはこういったところで不安を感じやすいのか、こういったところを確認しながら作成していきます。当然生徒は、中学生にもなると、その特徴だけではなく、まわりとの関わりの中でいろんな悩みを持ち始めますので、生徒の生の声であるとか、ご家庭で見える特徴を保護者の声をしっかりと参考にしながら、作成してまいります。作成にあたりましては、年度当初 1 ヶ月で行動観察をいたします。これに関しましては、プログラムより作成をしてまいります。この後、このプログラムがどのように変化していったかというのを紹介させていただきますが、このようなシステムに子どもの様子を打ち込むことによって、おおよそ、この生徒にはこういった課題が見られる、あるいはこういった特徴がみられるといったものが導き出されます。その中で最適なものを選択し、子どもたちの目標というふうにしていきます。例えば、心理検査の波形から生徒の特徴が見えてきますと、それに対して、教員がどのようにアプローチを変えるとよいのかが分かります。今、私は言葉で説明させていただいていますが、図で示したもののほうが見やすい、という生徒もいます。情報を取り入れるのにあたって、目なのか耳なのか、こういったところがアプローチとしては非常に重要ですので、参考にし、学校生活の中でより良く過ごせるような関わり方を探っております。また、本校ではこの個別指導計画(IEP)を毎日振り返る活動も行います。支援学校ですと多分、学校の先生、保護者、あるいは医療機関との連携をするためのツールとなっていると思いますが、本校では本人を中心にすえて、保護者の方、それから教員が、情報共有を測るためのものとして位置付けられています。毎日これを振り返るというあたりも、不登校特例制度ならではの取り組みではないかと思っております。

個別指導計画(IEP)		生徒用									
学期目標		学年目標									
前週 6月		5月									
目標	本人	5/11	5/12	5/13	5/14	保護者印	5/11	5/12	5/13	5/14	保護者印
		月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
相手の気持ちを考えようとする。 ①相手の嫌がることはやらない。 ②相手にしつこくしない。 ③先生に注意されたことはやらない。	本人が 担任印	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
嫌なこと、不安なこと、気になることがあったときは、先生に伝える。 (相談することで解決できることはいっぱいあるよ)	本人が 担任印	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
その日の楽しかったことを担任と話す。 (「いつどこで、だれが、どうした」をしっかりと伝える)	本人が 担任印	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	本人が 担任印	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

これが先ほど作成したものを生徒用に置き換えて、実際使用しているものです。毎日振り返りながら、我々教員が彼らの不安を取るためにやらなければならないことは、要は、毎日励まし続けることなんです。そして教員だけじゃなくて家でも励まし続ける、と。こういったすべての環境が、昨今で言うと、ワンチームになって子どもを支える体制を作ることが非常に重要ではないかと思っております。個別指導計画(IEP)で毎日振り返ることで、その日のうちに評価ができる。そして関わる全てのサポーターで共有できる。そのことによって自己肯定感が高まると思います。どこでも褒められるんです。どこでも、いいね、をされるんです。そういったところで翌日の登校に不安なく、つなげる。

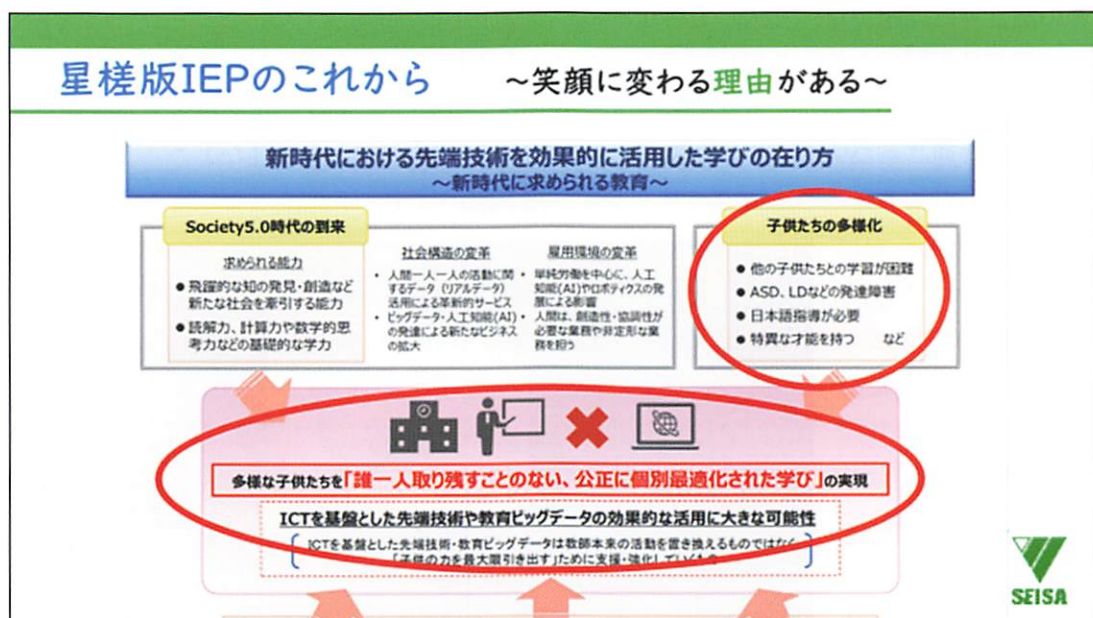
あとよくあるのは学校で良いというのが、家庭ではだめとか、ダブルスタンダードになりがちで、これってすごく困惑するので、この IEP を保護者の方と共有することで、このダブルスタンダードをなくしていきたいと思います。IEP には、学校と教育と家庭をつなぐ、励ましのコミュニケーションツールという役割もあるかと思います。



星槎版 IEP のこれまでということで、実は星槎は開学しまして、当初は 2 人から始まった塾でした。この頃は子どもの特徴を、メモ書きにして、この子こういうタイプだな、ここ得意だななんていう、ツルセミ時代と言われる、IEP 1.0 という時代がありました。その後ですね、星槎中学校の前身となった、フリースクール、私の働き始めですが、この頃になると先ほどの客観的な尺度を用いまして、それと行動の様子ですね、それを結びつける取り組みがなされるようになります。星槎版 IEP の誕生とさせていただきます。そして現在実は 3.0 ということで、星槎中学校になり、244 名という、かなりの情報量になってまいりました。また、教育の質、教員の関わり方を維持していくためにもこれがアナログで

あつてはなかなか難しいということで、システム化することにしました。そのことによって膨大なデータの中から、使用頻度の高いものが自動的に選択できる、と。要はこれまでの先輩の先生方の経験値、こういう励まし方、育み方が最適なんだというのを、今、現状はプログラムの状態ですが、それを導き出すところまでこぎつけています。さらにですね、その時、同時に終礼というものを行っておりました。毎日子どもに対してどういうことがあった、ということで指導してあるとかを共有します。現在は、こういった生徒情報をすべて同じサーバー内のところで情報共有することにしました。そのことによって生徒が増えても、教員が一様に子どもの状況を知る、という形ができ上がりました。現在、実は4.0ということで、文部科学省の補助事業で教員に対してタブレットを全台支給され、そのことによって即時情報共有が可能になっています。

また、今日のこの会のタイトルが、不登校特例制度が拓く日本の教育ということで先の話もしていかななくてははいけないかなと思っております。内閣府あるいは文部科学省につきましても、今後の未来、近い2030年であるか、その先を見越しまして、Society5.0、現在ですと我々4.0の世界にありますので、我々が情報を選択しにいつているというところですね。Society5.0の段階になるとAIが我々に対して最適な情報を振り分けてくれる、そんな時代になるというふうに書いてありました。そういった時代を踏まえて、柴山プランの最終まとめでしょうか、文部科学省からも新時代の学びを支える先端技術の最終まとめなるものが発表されておりました。その中の1ページ目です。



京都市立洛友中学校実践報告

西 本 幸 史 先生

まず、学校紹介と言うことで本校の様子を皆さんにお伝えさせて頂きたいと思います。本校では昼・夜間部の交流の時間に、祖父母ほど年齢の離れた夜間部生徒の皆さんが、「もう一度学校へ」を合い言葉に学ぶ姿を、目の当たりにすることによって知らず知らずの間に昼間部生徒が学びのエネルギーを得ています。校外学習や球技大会、文化祭や修学旅行等の学校行事と一緒に取り組むことを通して、夜間部のみなさんと信頼関係が構築され、社会性や人間性の伸長につながっています。また、夜間部のみなさんも、自らの学びや関わり合いが、昼間部の生徒の力になっていることを実感し、自尊感情が高まっています。

続きまして本校の課題と取り組みについてお話をさせて頂きたいと思います。本校は昼間部、夜間部共に、日々楽しく、お互いが良い関係を築きながら、学校生活を送っていますが、まだまだたくさんの課題があるのも事実です。その中から本日は昼間部を中心に、2点、「転入学に関して」と「教職員の共通理解」、特に生徒対応について、述べさせて頂きます。

では、ひとつめの「転入学に関して」です。本校へ転入学後に不適應により再び不登校となる生徒がいます。本校への転入学が決まると、原籍校への復帰や市内6ヶ所にある適応指導教室への入級は認められていません。したがって、慎重に本校への転入学を選択しなければその生徒自身の居場所が失われてしまったり、失敗体験を繰り返してしまうことになってしまいます。

転入学をするにあたって

- 2月 授業体験 検討①
- 3月 体験入学の希望
個別面談 検討②
- 4月 体験入学 検討③
個別懇談 (任意)
- 5月 転入学



生徒の実態を考慮に入れず、教師や保護者の思いだけで転入学を決定してしまうと生徒本人が辛い思いをしてしまうこともあります。実際、「不登校を経験した生徒が通う洛友中学校に転入学したのに、そこにすら通学できなくなってしまった」ということにひどく落胆しながら2年間在籍していた生徒も過去にはいました。京都市内には、本校と同じ不登校を経験した生徒が通う洛風中学校や先ほど述べさせて頂いたように、市内に適応指導教室が6ヶ所あります。ですので、本当に本校への転入学が最善の道であるかどうかを2月から4月までしっかりと検討を重ね、最終的に転入学を決定していきます。不登校支援センターでひとりひとりのケース会議を持ちます。今年度より春休みに対象生徒の保護者と個別面談を初めて実施しました。また同じ公立学校の連携として、原籍校の先生方と連絡を取り合うことも積極的に行いました。その結果、本校への転入学を辞退した生徒が原籍校に通学できるようになった、また自分のペースで無理なく適応指導教室に通っている、という声も聞くことができるようになりました。不登校の生徒をひとつの組織だけで抱えるのではなく、公立学校の連携・利点を最大限に活かし、京都市ではひとりでも多くの生徒が学校に通うことができるように努力をしております。

続きまして教職員の共通理解について述べさせて頂きたいと思います。本校は公立学校ですので毎年教職員の異動があります。一般の学校から来た先生は、不登校を経験した生徒の対応の難しさに直面します。「良かれ」と思って接したことが、逆にマイナスになってしまうことも多々あります。したがって、いくつかの観点をあげ、それらを共通理解としています。生徒対応に必要とされるもののひとつとして専門知識の習得・理解があげられます。近年の不登校をとりまく状況、生徒の特性、ユニバーサルデザイン等の積極的な専門知識の



習得を心掛けています。その取組として、月1回の研修会や、年に1度の洛風中学校との合同研修、また特例校やフリースクールに訪問・視察を行っています。そこで得た情報や知識を日々の教育活動に活かし、本校でのスタンダードとしております。

しかし基本的な専門知識だけでは対応できないこともあります。そこで「臨機応変な姿勢」「柔軟な思考や発想」が必要となってきます。その取り組みとして、週に1度 昼間部会・夜間部会を設け、SC・SSWとの連携として定期的なカンファレンスや話し合いを行ったり、月に1度、昼間部・夜間部合同で生徒指導委員会を開催したりしています。その中で、それぞれのシチュエーションに適した対応を組織全体のことと考え、それらを共通理解とすることに努めています。専門知識やセオリーだけに偏らず、柔軟な思考・発想も取り入れながら、普段からの日常会話・情報交換を大切にし、困ったときに気軽に話し合い、相談できる雰囲気づくりを心掛けています。それこそが生徒ファーストの考えにつながるものだと思っています。洛友中学校では、受容・支援・指導を大切にしています。生徒の実態を見極め、その成長段階に適した対応をしていくことが重要であると考えています。

②課題と取組～教職員の共通理解について

洛友中学校で大切にしていること



① **受容**

② **支援**

③ **指導**



ここで本校卒業生、女子の作文を卒業文集より抜粋して紹介したいと思います。

「3年間で振り返って」

1年生の時は、学校に行こうという気持ちがあっても、足がすくんで動けなくなってしまうことがよくありました。2年生になって職場体験を行ったときにしっかりと目標を立て、準

備・練習を行い、体験するという段階を踏むと、私なりにできることがたくさんあるということに気が付きはじめました。私はこの洛友中学校で「楽しい」ことだけでなく、自分にとって「苦しい」ことも経験しようと思いました。3年生になって、みんなでボウリングに行くことになりました。以前の私は「ボウリングは絶対に嫌だ」と言っていました。でも、事前に会場に足を運び、説明を聞き、細かく準備をしてみると当日は楽しく過ごすことができました。私が「苦しい」と思っていたことは「準備」や「経験」を重ねることで、解決につながるものが少しずつ分かってきたような気がします。

「苦しい」と思うことがあるたびに欠席を繰り返し、「もう二度と学校へは来ない」とも何度か言ったことがあった彼女でしたが、成功体験の積み重ねが自信となり、立派に巣立ちました。生徒ひとりひとりの歩みには違いがあります。洛友中学校では生徒ひとりひとりの成長段階に応じた接し方を試行錯誤しながら見つけ進んでいきます。本日このような発表をする機会を与えて頂いたことに大変感謝をしております。本当にありがとうございました。以上を持ちまして京都市立洛友中学校の発表を終わらせて頂きたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

西濃学園中学校実践報告

太田 宣子 スクールカウンセラー

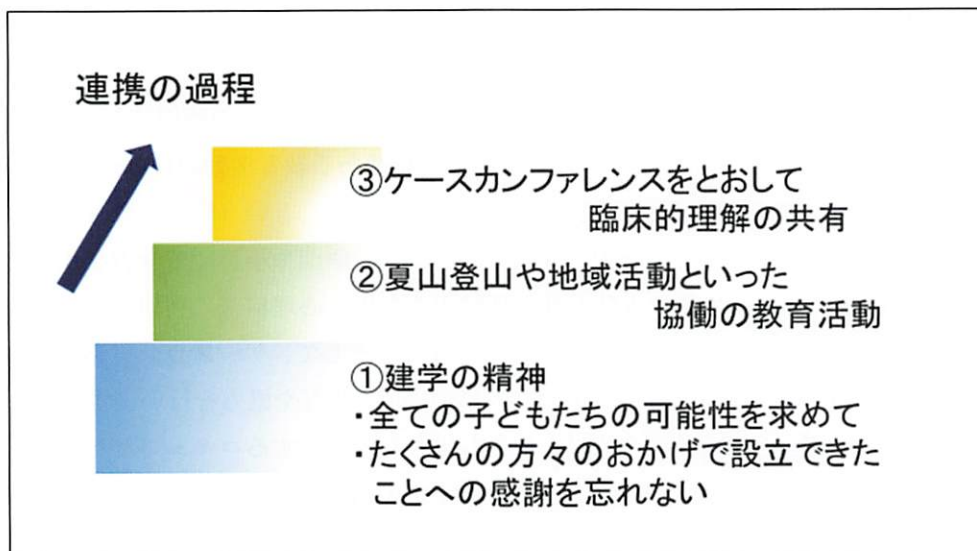


西濃学園中学は、設立 11 年目となり、社会参加のできる生徒を育てることを、大切な目標としています。そのため、「地域」「教育」「臨床」を学びの三本柱とし、それぞれに不登校特例校として、特別の教科課程も設けています。「地域」では、例えば毎日のお風呂を、道の駅藤橋温泉でお世話になっていることを始め、地域に支えられている一方で、地域の活性化に貢献する、という関係性を作っています。そして、「コラボレイト」という地域の方との協働の活動を行っています。「教育」では、生活こそ学習の土台である、と考え、寮生活を基本として学校生活を送ることを勧めています。寮のある唯一の特例校だ、というところは、強調したいところです。また「夏山登山」も特徴ある教育活動のひとつで、今年 10 周年を迎えました。特例校の教科課程として、「リカバリー」という時間を設け、取りこぼしてしまった内容について、それぞれの進度とペースで、個別や小集団で学習をする時間もあります。「臨床」では、生徒一人ひとりを理解するため、心理検査の利用や、カウンセリングを行い、寮や学習でのかかわりに活かしています。そして、ケースカンファレンスを通して、全ての職員が、生徒の理解とかかわり方について、共有や協力を行います。また、「ライフ・プランニング」という時間を設け、自分も他者も大切にコミュニケーションや、感情のコントロールを学んでいます。このような学びの活動を行う中で、3 年半ほど前から、生徒の間で自発的に、自主清掃という活動が生まれました。自主清掃は、自然と感謝の気持

ちが生まれたり、自分も人も気持ちいいと嬉しい、ということに気づくことのできる活動ですが、学園の他者に寛容でありながら、みなで向上していこう、という雰囲気を作っています。

以上の教育課程の工夫をしていますが、削減した教科時間数は、中1と中2の国語一コマ分と、中3の社会一コマ分、に過ぎず、一般校とほぼ同じ教育課程を営んでもいます。

やはり、卒業後の生徒の社会参加を考えると、今の社会が、求めることができるようになる、ということも大事で、授業時間数を減らし過ぎることもためられたからです。授業や集団行動など、現在の学校の枠に入ることでできない生徒たちを、これからの学校で育ててゆくためには、教科課程を変えるなど「学校の枠の在り方を変える方向性」と、「生徒へのかかわり方を工夫する方向性」があると思います。前者は、不登校特例校の基盤となっているわけですが、西濃学園は、後者により力点を置いている、と言えるのではないかと思います。西濃学園では、全職員が一枚岩となって、一人ひとりの生徒へのかかわり方を工夫するために、職員の連携は常に課題の一つでした。文部科学省も「チーム学校」という連携の概念を打ち出していますが、西濃学園のチームあるいは連携の理想の姿はいかなるものでしょうか。連携を振り返るにあたっては、今年は、転入生が多くなり、特に担任に、大きく負担がかかることになってしまう、といった変化も、連携を見直すきっかけとなりました。西濃学園では、担任は、生徒や保護者の窓口となり、また、学級経営の責任を担うなど、もっとも中心となって生徒とかかわります。また、授業と同様に、寮生活における生活指導も担任が担っており、負担は、担任に集中しがちです。しかし、全職員が、不登校生徒の理解やかわりについて、専門的な知識を共有し、経験を積んできたのであれば、生徒の人数が増えたことで、生徒へのかかわりがおろそかになってはなりません。また、担任が負担に潰されず、より指導能力を発揮しやすい連携があるはずだ、と考え、私たちは、今一度、連携を見直しました。



これは、西濃学園の連携を、つくってきた活動や精神です。まず、第1段階の、建学の精神に共感をする者たちが集まり、西濃学園の教育活動は始まりました。多様な職業経験を持つ者たちが集まりましたが、この建学の精神を皆が大事にしている、という第一段階は、「わたくしりつ」の学校だからこそその土台と言えるでしょう。そして、学校の設立からまもなく、職員全員で行う夏山登山や地域活動といった、協働無くしては成り立たない教育活動も始まり、その教育活動を通して、互いの人となりを理解し、意思疎通を図っていきました。しかし、生徒の指導において、多様な職員が、多様な価値観を持って、かかわっていました。発達の特性や、情緒的な難しさを持った生徒にとっては、統一感のない指導によって、混乱を引き起こすこともありました。そこで、臨床心理学の生徒理解やかかわり方を、共通の基盤として学びました。また、ことあるごとに、ケースカンファレンスを行い、生徒の成長の姿や、そのプロセスを、共有することができるようになっていきました。全ての職員が、不登校の理解やかかわりにおいて、専門性を身に付けました。ここまで来るのに、10年近くかかりました。また、経験に裏付けられたある程度の自信をもって、不登校特例校を申請し、指定をいただいたのもこの頃となります。

ところで、西濃学園には、授業に出ない生徒たちが、居場所としている「憩いの間」という空間がありますが、この部屋の使い方をめぐる、職員の意識の変化を見ると、連携の過程が見えてきます。「憩いの間」とは、授業や集団活動に入れない生徒が、自ら体調を整えたり、心を落ち着けたりする空間です。読書やオセロ、トランプなどを通して、生徒同士が、また、生徒と職員がコミュニケーションを図ることもできます。この部屋をベース基地としながら、授業や集団活動に慣れていく生徒もいます。建学の精神に共感して集まった、①の段階では、一人ひとりが良いと思うやり方で、生徒を囲い込むようにかかわっていたため、連携という概念は乏しく、「憩いの間」のような部屋の必要性は、検討されることがありませんでした。互いの人となりを理解していく②の段階では、価値観の合う者たちの間で、連携が始まりました。その過程で「憩いの間」が誕生しましたが、生徒にさぼる口実を与えるだけだ、と考える職員たちもあり、意見が異なるもの同士が対立してしまう状況も生まれました。そこで、再三、ケースカンファレンスの場を設け、生徒の理解やかかわり方を皆が学び合い、共通理解の土壌を作り、③の段階へと進みました。それでも、そこで遊んでいるように見える生徒がいると、「担任がしっかり指導しないからだ」という空気が生じましたが、ケースカンファレンスを通して、みなが納得した上で、「憩いの間」で過ごす生徒を見守ることが可能となっていきました。しかし、担任以外の職員には「うまくかかわれないのだったら様子を見ていよう」という消極的な姿勢も多く、全職員が不登校対応の専門性を持っている、という大きな資源を、十分に活かすことのできる連携を、考える必要がありました。

そこで、担任と担任以外の職員に、互いの連携に関するアンケートを行いました。すると、担任の葛藤が、また、担任以外の職員の葛藤が明らかになりました。

まず、担任には、生徒がトラブルを起こすと「担任がしっかりしていないから」と評価をされているのではないかと感じるような、被害感や孤立感があることが分かりました。担任をやってみないと分かりにくいものですが、担任以外の職員は、担任の葛藤を、知ることができました。一方、担任以外の職員も、担任をサポートしたい、と望むからこそ、担任と異なる指導となってはまずいから、と遠慮していたり、もっと情報を共有したい、と思っていることが分かりました。アンケート後には、連携を考える実行委員会で話し合いを行いました。そこで、西濃学園の連携とは、担任の負担を分担して、みなが背負えば、うまく回っていくようになるというものではないことが見えてきました。連携、というと、合理的に、分担や分業をうまくできることも大事なことだと思いますが、分担の結果、成果が小さくなってしまえば元も子もなくなってしまいます。一人の生徒のまるごとを、ひとりの教師が担うことが、生徒の成長には意味を持つのだ、という知見は、西濃学園の生徒へのかかわり方を考える際、大きな意味を持つ知見だと思います。

それでは、西濃学園の理想の連携の在り方について、まとめたいと思います。どんな人間関係でも、齟齬や摩擦は生じます。しかし、役割の境界を明確にして、それぞれの葛藤をゼロにするのがよい連携というわけではない、と考えます。

まず、葛藤が起きていることを認め合い、本音で話し合え、しかし、分断へと向かわず、そこから互いに学ぼうとすると、生徒のために互いを活かそうという発想が生まれ、葛藤が建設的な連携につながっています。今は、互いの葛藤を本音で話し合い、互いを活かそうとする、新たな関係性をつくりつつあることで、信頼感が増し、互いがより能動的に動くようになってきました。すると、情報共有に終わらず、協働指導へつなげていけるようになってきています。このような職員間の関係は、生徒間の関係にも影響が小さくない、と感じています。生徒たちは、合わない相手に対しても、排除することが少なくなりました。そして、トラブルを起こす生徒に対しても、寛容さを示すように、なってきました。必然的に、トラブル自体が減ったと、実感しています。アナログで泥臭い、人と人との向き合い方を掘り下げていく、そんな連携の目指し方となっていますが、職員間の連携の質を、豊かにしていくことは、本質的なところで、教育の要となっていると思います。生徒数 39 名、職員数 21 名の小規模校だからできることも大きい、とも思っています。皆様のご意見をいただきさらに検討してまいりたいと思います。

連携についてのアンケート

担任に対して

①担任として、担任以外の職員の方にやってもらってうれしかったこと、助かったことにはどのようなことがありますか。

②担任として、担任以外の職員にやってもらって、戸惑ったこと、困ってしまったことはどのようなことがありますか。

担任以外の職員に対して

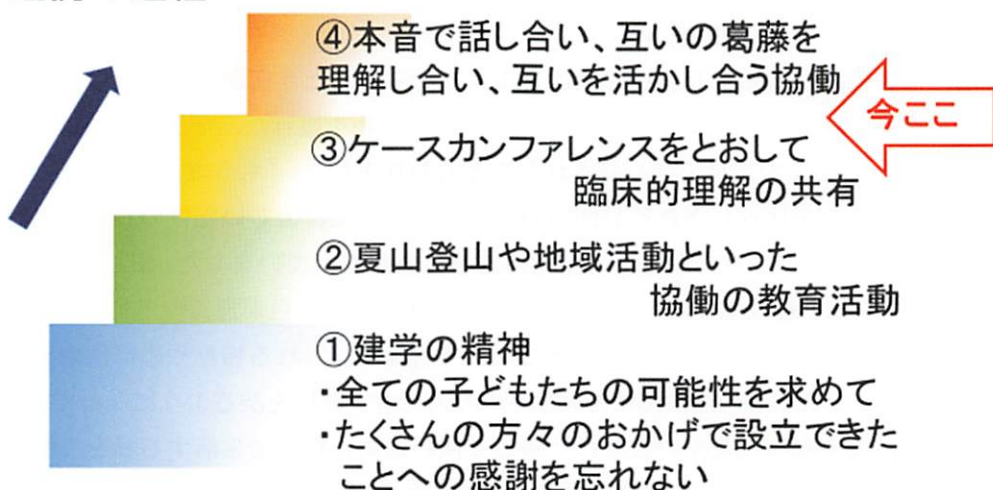
①担任として、十分にやっていると思うところは、どのようなところでしょうか。

②担任として、もっと気をつけた方がいいと思うところ(やり過ぎなところ、あるいは足りないところ)は、どのようなところでしょうか。

③あなたが担任との関係において、生徒とかかわる上で気をつけていることはどのようなことですか。

④あなたが担任でないことによって、生徒とかかわりの中でやりづらいと感じることはどのようなことですか。

連携の過程



私に見える世界

西濃学園中学校3年 池田 翠

赤や黄色の色鮮やかな花々。雲ひとつない青空。この言葉を聞いてみなさんはどんなことを想像しますか。彩りに溢れた美しい景色が浮かびませんか。でも、もしその景色から色が無くなってしまったら、あなたはそんな世界、想像することができますか。

私は幼い頃から周りに合わせて動くことが苦手でした。みんなが鞆に荷物を片付けている横で、まだ次の日の予定を書いているなんてことはよくあることで、気付けばいつも置いてけぼりでした。遅れた時間を取り戻そうと急いで片付けて帰ったある日、自宅で鞆を開けると隣の子の教科書が入っていることに気付いたのです。『しまったあ。どうしよう。』気が動転しましたが、次の日謝って返しました。しかし私の生活テンポは相変わらずで、こんな失敗を何度も繰り返してしまいました。

「いつも間違えてゴメン。」

《また？ワザとじゃない？もう、人の物を盗っていく子だってみんなにも言うから。》

「お願い、そんなこと言わないで…。」

《じゃあ、私の言うこと何でも聞いて！》

要求は荷物持ちから始まり、掃除場所を1人でやらされたり宿題を押し付けられたり学年が上がるにつれエスカレートしていきました。《私の物を盗れたんだから、あの子の物も盗れるでしょ。》そんな言葉で強く脅されたこともありました。『もう嫌だ！』叫びたくなることもありました。が仕返しされる恐怖が頭をよぎりました。苦しいだけの日々を過ごすうちに『何も考えず言いなりになろう…。』そう思うようになっていました。楽しい、面白い、辛い、苦しい、私を彩っていた1つ1つの感情が、1つ1つの色が無くなっていき、私に見える世界は白と黒だけになってしまいました。でも傷つけられる痛みや恐怖に耐えるよりはずっとマシでした。その後だんだん朝起きれなくなり、登校を渋るようになって、とうとう学校へ行けなくなってしまいました。顔を伺い怯えた様子で生活する私を心配した母は環境を変えることを提案し、中学2年の九月、地元、神奈川県を離れ不登校で悩む生徒たちが通う全寮制の中学校へ転校しました。

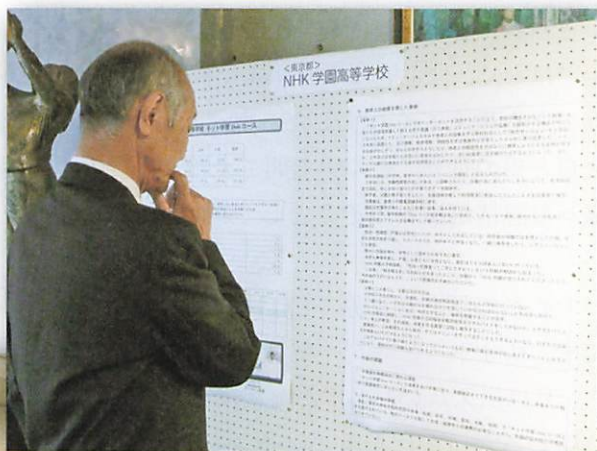
それから半年が経った頃、生徒会から早朝のボランティア清掃のお知らせがありました。1人の生徒がいくつかの場所を担当していることや女子トイレでさえ男子生徒にやってもらっていることを知り『せめてトイレくらいは私がやろう。』そう思い参加してみることにしました。始めた頃は寒いし眠いしもうやめようと思う日々が続きましたが、毎日続けるうちにその思いは変わっていきました。それは廊下、ゴミ箱、トイレ、階段がいつも当たり前のように綺麗だったのは、自主的にやっていた人たちのおかげだと気付いたからです。またすれ違う先生と一緒に参加している仲間たちから掛けてもらった「おはよう！いつもあり

がとうね!」「お疲れ様。」というあたたかくて優しい言葉は、トイレが綺麗になったかどうかではなく、自主的に取り組んだ私の気持ちを認めてくれる、そんな人たちもいるのだということを見せてくれました。刺さるような冷たい言葉で命令され否定され続けた私に見えた白と黒の世界。その中で聞こえたあたたかくて優しい言葉。今、私の中には様々な色が、様々な感情が溢れ出そうとしています。

今の私に見える世界。それはこの主張を聞いている皆さんと同じ『未来へ拓かれた世界』です。私はやっとスタートラインに立てました。もし、あなたも色のない世界で彷徨うのなら、私は伝えたい。必ずあなたに寄り添ってくれる仲間がいることを。じっと待つだけでなく関わるきっかけを見つけることが大切だということを。私はまだ顔色を伺って伝えることをためらうときもありますが、私に見える世界がもっと拓かれ、もっと色鮮やかになるように自分の気持ちと素直に向き合って生きていきます。



文部科学省と
不登校特例校全12校の
ポスター発表



ポスターを熱心に
見る来場者

西濃学園中学校

西濃学園とは

1991年、不登校の子どもの支援を目的としたボランティア活動をはじめ、2009年、学校法人西濃学園 西濃学園中学校を開校しました。

西濃学園中学校では、少人数教育の中で生徒一人一人の学習レベルに応じた個別の対応を行います。藤橋地区の自然に恵まれた環境の中で、農作業やお店の運営など、様々な体験学習を通して『生きる力』を身に付けることを目標にしています。



2017年 文部科学省より

『不登校特例校』

に指定されました！

<不登校特例校とは>

文部科学大臣が、学校を指定し、特定の学校において教育課程の基準によらずに、特別の教育過程を編成して教育を実践することができる学校です。現在、**全国に12校**（令和元年）指定されています。

西濃学園では、地域との交流時間を大切に、人と人との出会いを大切にしています。人との関わりを多く持つことで、社会性を身につけていきます。

特例校オリジナル授業

Collaborate コラボレート

授業という枠にとらわれず、様々な体験学習や集団ゲームに取り組んでいます。

伝統行事やボランティア活動、ものづくり、外部講師を招いての講演会など、色々な企画を通して子ども達の社会性を育てる教育を行っています。



Life planning マイマッププランニング

学校生活は人生の基盤を作る場であると考え、卒業後の社会生活を見据え、コミュニケーション能力のアップやセルフコントロール、生活習慣の作り方を学んでいます。

自分の力で「人生を生き切る」ことを目標にしています。



Recovery リカバリー

学校に行けなかった期間や、勉強できなかった期間は人によって違います。同じ学年でも能力に差が生じるため、「自分はできない」と悩んでしまいがちです。学んだことで「自分がどれだけ成長しているのか」というところに視点を置き、個々の能力に応じた勉強の時間を設けています。



地域と共に生きる

西濃学園のある藤橋地区は、豊かな自然に恵まれ、人が助け合い支え合うことを当然とし、そのような関係の中に人としての喜びがあるという価値観がいたる所に生きています。そんな藤橋の風土に包まれ地域の方々と触れ合いを大切に、学校だけでなく地域と共に教育していくことで、肯定的な自己の存在感を感じることができ、人としての土台を形成することができるようになります。

一方、少子高齢化・過疎化する藤橋地区は、西濃学園との親密な関係性によって行事や伝統の継承が可能となりました。つまり、生徒との関わりが、藤橋地域の方々の活力につながり、その活力が村の活力へと繋がっています。このように学校と地域が互いに助け合い、補い合うことで、両者の解決したい問題に希望を見出すことができます。

地域学習

2010年度から、藤橋の文化や生き方を学ぶ、「地域学習」の時間を設けてきました。

地域の文化や生き方に触れ、社会体験を多く積むことにより、地域社会の成り立ちを学び、生徒の世界を広げ、社会に出た時に生きやすくなるようにこういった活動の時間を多く設けています。



学校法人西濃学園

寮生活紹介

規則正しい生活ができるようになり生活が安定すること、また、生活の場で十分安心できることが、学習を始め、様々な稼働の基盤になると考えています。西濃学園では、寮生活を通して、規則正しい生活リズムの定着、集団生活の中で社会性を身につけること、そして、あたたかな人間関係の体験と構築ができることを目指しています。

自分一人では決まった時間に起きることや寝ることができない生徒も、集団の流れに乗ることできるようになります。とはいえ、生徒が集団の流れに乗ることができるかどうかは個人差も大きく、時間のかかる子もいます。焦らず、強制せずとも諦めないことで、少しずつ規則正しい生活への重要性の認識が高まり、習慣化されていきます。

自主清掃の取組

学園長が毎朝、掃除をしている姿を見て、ある生徒が“僕も手伝いたい”と自主的に清掃活動を始めました。すると、彼の背中を見ていた他の生徒たちにも自主清掃の輪が広がりました。

その流れは彼が卒業した現在も受け継がれています。



やりたいことを応援！部活動

西濃学園の部活動は、“これ！”と決まっています。生徒が「やりたいな」と思ったことを応援します。新しいことを一緒に初めて見ませんか？

文化系

- ★園芸部 ★和太鼓部 ★写真部 ★模型部 ★軽音部
- ★妄想ストーリークラブ ★ボードゲーム研究会 ★芸術部



運動系

- ★軽スポーツ部 ★軟式野球部
- ★J(ト)モニコン部 ★陸上部

速報！

2019年12月1日(日)
揖斐郡駅伝大会に西濃学園から3チーム出場します！
応援よろしくお願いします！



夏山登山

学園が最も重視している夏山登山は今年で10周年を迎えました。この登山行事は子ども達の成長にとって、今までの生活や通常の学校生活では考えられない極めて大きな影響を与えると考えています。実施後に子ども達が「本当に素晴らしい」と口を揃えて言うのを聞くと、「やってよかった」と思えるのです。登山後の生徒達は、登山前よりも明確な目標を持って、部活動や勉強に励んでいます。命がけの登山は、生徒達に「生きる」意義を教えてくれます。



ベースキャンプ「徳澤園」



檜ヶ岳 標高3,180m →



濁沢 標高2,309m ↑



蝶ヶ岳 標高2,677m ↑



文化祭での発表！

学校法人西濃学園

令和元年度 生徒会

私達生徒会は高校2年生から3年生までの7人で活動をしています。私達は学校生活を送る上での問題点や課題などを改善・解決することを目的として活動しています。主な仕事内容は購買部の運営や生徒会新聞の発行、校内行事の企画などを行っています。



購買部

私達生徒会は今年度の5月より藤橋校舎(中学校舎)にて、購買部を開始しました。生徒のいる寮の近くにコンビニやスーパーなど気軽に物を買う場所がなく不便に思っていました。

そこで生徒が買い出し以外でも物が買えるようにと、ジュースやお菓子などの飲食物を買える購買部を開始しました。ここで出た利益は生徒会企画で生徒に還元したり校舎設備の改善費用に当てるつもりです。

生徒会新聞



生徒会役員



<クリスマス会>



<送別会>

校内行事企画

清掃活動



西濃学園では毎朝生徒がボランティアで掃除をしてくれています。以前は学園長が一人で掃除をしてくださっていたのですが、体調を崩され入院されたときに生徒たちが自分たちも手伝おうと朝の掃除を始めました。今では、朝清掃管理ボードも作られ、生徒たちは寝る前に掃除する場所に自ら名前を書き朝掃除をやってくれています。朝掃除をする事で清々しい気持ちで1日を過ごすことができ、日々続けることで物事をすぐに投げ出さないような継続力が身につきました。

これからの私たちの課題は、この朝の掃除の質をどのようにして向上させていくかです。ボランティアに参加してくれる人も多くなり、生徒一人一人が掃除に対して意識的に取り組んでくれるようになってきました。

不登校特例校シンポジウム

司会：嶋野道弘先生（元文教大学教育学部教授）

コメンテーター

加藤諦三先生（作家・早稲田大学名誉教授）

松木秀彰氏（文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長

江口昇勇先生（日本福祉大学スポーツ科学部教授）

古田信宏先生（岐阜大学特任教授・日本学校教育相談学会岐阜県支部理事長）

総合司会・丹羽

それではこれより後半の部、シンポジウムへ入ります。はじめに、コメンテーターの先生方の紹介をさせていただきます。ステージ向かって左手より元文教大学教育学部教授嶋野道弘様、西濃学園中学校太田宣子、京都市立洛友中学校西本幸史様、星槎中学校蓮田亮大様、作家・早稲田大学名誉教授加藤諦三様、文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長松木秀彰様、日本福祉大学スポーツ科学部教授江口昇勇様、岐阜大学特任教授・日本学校相談学会岐阜県支部理事長古田信宏様、ありがとうございました。それではここからは司会を嶋野道弘先生に代わらせていただきます。嶋野先生、よろしくお願いいたします。

司会：嶋野先生

はい。前半の一番最後、池田さんの少年の主張って、皆さんどうでしたか。私、本当に引き込まれてしまいました。池田さんは、話す前にこちらにきて、視線を三方向に向けて、それから話を始められたんですね。うーん。なんて存在感があるのか、というふうに思って、どんどん話に引き込まれたんですけど、素晴らしかったです。

前半、三校の発表もありました。いずれの学校についても、精神的な面や理念、あるいは信念、情熱、あるいは様々な取り組みの創意工夫、いずれの面を取ってみても私個人的には優れた学校だな、と思ったわけなんですけれども、また、その他12校のポスターの発表もございました。これらの学校は、不登校に陥った子どもたちが、これらの学校に来て、自立的な力を身に付けて進学したり、社会に出たりしていくという成果を出している上で、相当の優れた実績を出していると思います。そういう発表を聞いた上で、今日、コメンテーターの皆さん、4名いらっしゃるんですけれども、お尋ねしたいと思いますが、コメンテーターの皆さまは、この特例校の学校三校について、どんなところに着眼されたのか、このあたりからお話しいただきたいと思いますが、じゃ、古田さんからお願いします。コメンテーターの皆さんには、私、無理を申し上げましてですね、キーワードを書いていたいただきますので、それをお示ししながら、お話しいただきたいと思います。お願いします。

古田先生

はい。ではよろしくお願いいたします。まず、**星槎中学校**さんですが、**個別の指導計画と記録の蓄積**ということを挙げさせていただきました。まず、個別の指導計画と言いますと、私、長らく特別支援教育に関わっていたので、障害のあるお子さんへの個別の指導計画、というふうなイメージなんです。星槎中学校さんの個別指導計画は障害ではなく、不適応の行動に焦点を当てた個別の指導計画が作成されていて、さらにそれに基づく、それがAIによって非常に多くのデータが蓄積されているところが素晴らしいと思いました。多くのデータが蓄積されているということは、多くの子にとって一般化できることも見えてくるでしょうし、その子にとって一般化できること、という見方もできるでしょうし、その子の中でも「おやっ」と思うようなことも見えてくるのではないかなと思いました。二つ目に、**洛友中学校**さんですけど、一つ目に挙げさせてもらったのは、公立学校であるということで、**教職員の移動**があるということですね。ということは、何年か経つと、洛友中学校さんの先生方は一般の学校へ戻られるわけですが、そのときにこの洛友中学校さんで学んだことが、きっと活かせるのではないかな、そう考えると、洛友中学校さんでの今の教育の経験がきつと、10年後になってしまうかもしれませんが、多くの京都市立の学校に広がっていくということからも、とても魅力的な学校かな、と思いました。もう一つ、夜間中学校が併設されているということで、教科の授業と一緒にやられるということは、そこで異年齢集団ができているということで、地域がそこにもうある、という考え方ができるのではないかな、**地域とともに歩む学校**というのを作っておられるんだろうな、そんなふうに思いました。**西濃中学校**さんですけど、まず一つ目に、**寮生活**ということですが、家族と切り離していることによって、自分自身の家庭生活を見直すことにもなるでしょうし、家族の方から見てもこの子の意味というのを見直すことになっているのではないかな、そんなふうに思いました。本当の意味でのソーシャルスキルトレーニング、まさしくソーシャルスキルトレーニングなんだろうなと思います。もう一つ、すごいなと思ったのは、全ての職員が専門性を持っている、共有する、というところまで**高められた連携**で、こういうことはなかなか、先ほどの公立学校さんのようなところでは、ちょっと難しいかもしれませんが、本当に困っている子、悩んでいる子に対して、必要な学校、といえるのではないかなと思いました。以上です。

司会：嶋野先生

ありがとうございました。じゃあ、続いて、江口さん、お願いします。

江口先生

私はですね。三つの学校についてですね、まず、**星槎**の取り組みには、**時代を先取りする教育**というのを実感して、そこを実践してみえているというのは、素晴らしいなと思いまし

た。それから、**洛友中**の発表についてはですね、昼間部と夜間部の交流というのが、まさに**人間教育の原点**かなと。世代間も違うわけですね。異文化交流が、教育的な効果をもものすごくもっているな、というのを感じました。それから、**西濃学園**さんの方は、ある意味非常に泥臭い取り組みをしてみえて、でもその**泥臭さがあたたかみ**を生んでいるんじゃないか、そんなふうに感じました。

ちょっとですね、三つの学校に共通して私の言いたいことがあってですね、学校へのコメントよりは、不登校そのものに対する話をちょっとさせてください。このシンポジウムは不登校特例校が拓く日本の教育、という非常に建設的に、明るい未来を予測させるテーマになっているな、と思っています。そういう中で、これから私が話すことは、冷や水を浴びせるような無粋な発言になるんじゃないか、と危惧しています。しかし、不登校という現象に不可避な、人間の闇の問題、そこは避けて通れない、あるいはそれを心しておくことは非常に有意な視点をもたらすんじゃないかと思っています。私自身はですね、大学院を出て最初に勤めたところが精神病院でした。そこでは、棺桶退院、死んで棺桶に入ってやっと退院できるという、そういうことを口にする患者さんたちを前に非常にしんどい面接をしてきました。それが出発で、人というものの不可避な闇をずっと見続ける仕事に興味を持っています。そして、現在もですね、児童養護施設、母子生活支援施設、それから乳児院といった、いわゆる虐待なり家庭内の不和なり様々な問題を背負えるお子さんや親御さんのサポートをしている、そういった施設で、スーパーヴィジョン、職員の指導をしています。それから、犯罪、非行に関わる保護観察所というところがありまして、そこにも月一行って、保護観察官のスーパーヴィジョンをしています。そういったところで出会うお子さんたち、あるいは親御さんも含めて、すこぶる健康度が低いんですね。社会の中で元気に生きていく、ということ进行期待することすら非常に難しい人たちなのかな、と思っています。もちろん、こういったところに来れるだけのエネルギーもないので特例校に入られるってことは、それほど多くはないかもしれません。でも中には、いろんな条件で入って来られる方がいると思います。教育というのは、教え、育む、という目標があります。それだけに高い理想を掲げて取り組むものですね。ですから、私は、それを否定する気は全くありませんし、三校の取り組みに関しては心から評価しております。ただ、どれだけそうした試行錯誤を試みても、それでもなかなか授業に出られない、あるいは卒業するってことも難しい、という子たちは、必ず出現すると思っています。で、その子たちにとっての、特例校がどんな意味を持つのかなと思ったときに、実は私は不登校の親の会というのを、もう 30 年近く続けております。そして、その中の半数のお子さんはすでに 30 を超えていますけれども、いまだに引きこもっています。そういう子たちを見ていると、なかなか予定調和というのですかね、この学校を出て、元気に社会で活躍する、ということも難しい子たちは必ずいる。じゃあ、その子たちにとって、特例校に来たときに、そこでの学び、そこでの先生との出会い、それはその子たちにとっての生涯の宝になるんじゃないか。勉強して単位を取るだけじゃなくて、そこに

いたことだけで、その子の存在を下支えするような、貴重な体験になるのではないか。そう
いった視点を持っていただけるとありがたいな、と。卒業だけが全てではない、単位を取る
だけが全てではない、その子たちの生きるという存在そのものを下支えする、そういったも
のを目指していただけることも意味があるかな、と思って、一言、発言をさせていただきました。

司会：嶋野先生

ありがとうございました。今のお話は、この先、日本の教育を不登校特例校が拓くという
ところで、さらに深めていただきたいと思いますけれども、それでは続いて、松木さんから
三校の発表の着眼点、どこに目を付けられたか、お話しいただきたいと思います。

文部科学省：松木氏

私が三校の発表を聞きながら、注意した着眼点は、不登校の取り組みの中で優れたもの、
他の学校でもぜひやってもらいたいと思うものはなんだろう、と考えて、選んでいきまし
た。そういう意味で、まず一つ目なんですけれど、星槎さんについては、個別最適化。私は、
生徒指導室長という肩書を持っており、生徒指導全般を担当しておりますけれども、よくい
じめですとか、不登校とか自殺予防とか、暴力行為とか後、児童虐待も少し担当しておりま
すが、よく聞くのは子どもたちはさまざまな問題を抱えていることがあるね、と。例えば発
達障害系でありましたり、あるいはLGBTであったり、あるいは東日本大震災で避難してき
た子どもであったり重度のアトピーを抱えている子どもであったりですね、様々な背景を
抱えている子どもに対してそれぞれ配慮をすべきだ、というのが生徒指導で求められてい
る、というのが今の状況かな、と思っています。それに加えて、学習指導の方でも、ICTを
使って、個別に、最適化されたプログラムが提供できないか、というのが、society5.0の
中でも出ている。というのが、今の現状でして、そういう一面などの生徒指導的な部分と学
習指導の部分で、個別最適化というのがこれから学校が求められてくるのかな。そういう意
味で、星槎さんの取り組みはそその先端的な取り組みをされていると私は受け止めたので
ございます。

それから次の、洛友中学校、これもすごく抽象的な言葉になっちゃいましたけれど、子ど
もの尊厳の尊重というキーワードが私は素直に頭に浮かんできたわけでございます。これ
はほかの学校さんでもされていると思いますけれども、子どもの話をよく聞かない、とか頭
ごなしに相手を否定するとか、そういう間違った対応というものを先生とか、場合によつて
は親がやってしまったときには、子どもが非常に苦しい思いをするわけですが、共通
して言えるのは子どもの尊厳の尊重ができていない、というふうに常に思っております。だ
から、なんでこんなことができないの、といって親が子どもに手をあげてしまうとか、そう
いうことになるのかな、と日ごろから考えていたところです。そういったところで、洛友さ

んの場合、非常に丁寧に子どもたちのことを考えて専門的知見を取り入れながら、指導するのではなくて、まず受容をして、支援をしてそれからやっと指導に入るんだといった丁寧な対応をしたり、子どもの意思を尊重したりといったような丁寧な対応をされているな、と。これは子どもの尊厳を尊重するといった態度なしにはできないことだろうと感じました。

それから、最後の西濃学園中学ですけれども、チーム学校でございます。これはよく聞くんですけれどもやはり生徒に対して個々の先生が生徒のまるごとを受け止めるという情熱も必要なんですけれども、そこから先に情報共有につなげて組織で対応していくということが重要だと思います。その過程で教職員の方々というのは、それぞれの考え方があって、最初はすごくまとめにくいと思うのですけれども、そこで共通理解をしっかりと図っていった、協働の部分につなげていくと、協力の協に働く、という字ですね。協働。ここにつなげていくという取り組みをされているのが非常に素晴らしいなと感じました。問題が起こる学校というのは、チーム学校というのができていないことが本当に多く、西濃学園さんはじめ三校の学校さん、チーム学校というのが非常に機能しているな、というふうに見ておりました。こういった部分も他の学校にも、ちゃんとやってほしいなという意味で、西濃学園さんについてはこの部分が非常に印象に残ったのでございます。以上でございます。

司会: 嶋野先生

ありがとうございます。じゃあ、加藤先生、お願いいたします。

加藤先生

加藤でございます。各先生方のお話を伺いながら、本当に、心身共に献身的に生徒のために頑張っておられる姿をお聞きして、大変感動しました。それと同時に、もう一つの問題は、ご存知のように不登校というのは当たり前のように我々は使っているわけですが、最初にご存知のように登校拒否という言葉だったわけです。この登校拒否という言葉が、だんだんと不登校という言葉になってきた背景というのは何かというと、実は不登校の原因というのは、学校の方にあるんじゃなくて、家庭の方にあるんだ、ということがほぼわかってきた。これは英語でいうと、schoolfobia というのが最初に出て、schoolfobia というのが登校拒否と日本では言われていた。ところが、英文の論文を読んでもわかるんですが、これはほとんどが schoolfobia という捉え方に反対しております。お前全部世界的な論文読んだか、と言われますと読んでないですけど、少なくとも僕が読んだ限り、世界的に schoolfobia という考え方ではなくなってきた。つまり、学校が原因ではないということなんですね。つまり、高所恐怖症というのは、高所が原因で、広場恐怖症というのは、広場が原因なわけなんです。そこが原因で、広場に行けない、学校に行けない。schoolfobia という言葉が出たときは、最初学校が原因で学校に行けない、と思われていました。高所恐怖症と同じことですよ。ところが、どうもそうではないらしい、というようなことが言われ

ました。一つだけちょっと例を挙げますと、ボウルビィといいます、おそらく人類の子どもの研究者としては最も偉大な人だと思うんですけどもそういう人なんかは、学校に行けない子の家庭のタイプの分類までしています。学校に行けない子どもの家庭はこういう家庭である、ということなわけです。今日、非常に、先生方と文科省の方とお話の中で感動したのは、さっき、文科省の中で、これは大変深い問題で様々な問題が絡んでいるから深堀りする必要がある、と。この言葉を僕はですね、正直言って、文科省の方から聞いたのは大変感動しました。というのは、文科省のこれまでの不登校対策を見ると、この視点が、大変失礼な言い方ですけど、少ないんですね。で、学校の現場でも、この文科省の対応の仕方にも不満がある。例えば、僕も20代のころから、学校のPTAの講演なんかに行っておりますから、50年以上、半世紀以上、北海道から沖縄まで講演に行っているわけですけども、その中で、PTAの前で話をする前に、職員室で会議をしたときに、職員室で受けた言葉というのはどういうことかということ、「最高の教育者はお母さんです」と。そうしたら、先生、それをPTAの前で言ってください、それを言ってください、というんですよ。つまり、全部学校に押しつけちゃって、学校が悪いんだ、という言い方をされちゃっているから、「最高の教育者はお母さんです」という言葉、それ言ってください、と。そういうような中で、今日の先生方の発表というのは、苦しい現実にいるいろいろ接してきた方だなと思いました。

最初の神奈川の方でいいますと、**保護者との個別面談**、**保護者との個別指導**という言葉が出ています。これどうしようもなく家庭の問題と不登校の問題が絡まっているということが身に沁みてなければ、保護者と個別面談をしなければならないということが出てこないはずなんですね。ですから、そういう意味で保護者との個別面談をして、保護者や家庭とうまく連携しないと、これは、二番目の発表の方の話にも出ましたが、その方の言葉でいいますと**ダブルスタンダード**という言葉が出ましたが、これもキーポイントなんですね。キーポイントというのはどういうことかと申しますと、コミュニケーション能力がないから不登校になるわけですから、**ダブルスタンダード**という概念がコミュニケーション能力がなんで破壊されるかということを説明しているんですね。不登校の問題には、コミュニケーション能力がなぜ破壊されているかという問題に取り組まない限りどう頑張ったってうまくいかないんですよ。発表者の方は、**ダブルバインド**、**ダブルスタンダード**は避けるということを言われた。これは、もうちょっと専門的に言うと、**ダブルバインドセオリー**という二重の束縛理論というのがあるんですけども、これが子どものコミュニケーション能力を破壊するという。だから、家庭の中で、**ダブルバインドセオリー**が行われていると、子どものコミュニケーション能力が破壊される。**ダブルバインド**という言葉じゃなくて、**ダブルスタンダード**という言葉で表現されていましたが、その概念が出てきたことを非常に嬉しく思いました。それに、教育では**励ます**ことが大切だと、まさにその通りなんですね。どんなにいいこと言って、どんなに頑張ったって、うまくいかないのは教える側と教えられ側の信頼関係がなければ教育なんてうまくいくはずがないわけです。今日、まず発表の中

に、その問題が出てきた。信頼感という言葉は出ませんでしたけれど、励ますという言葉が出てきているんですね。励ますときには、根底に信頼関係がなくて励ましたら、そんなのストレスになるだけです。子どもにとって、害になるだけです。信頼感があって、励ますから、それは、プラスになるわけです。ですから、そういう意味で、今日は素晴らしい先生方の日頃の努力が実ったような話を伺ったと思ったのですけれども、そういう意味で、保護者の個別面談とか、家庭での教育と学校での教育の教育方針が異なってはならないし、不登校の問題は学校だけで解決できる問題ではない、発表の中で、欠けているところがあるとすれば、不登校の問題は学校だけでは解決できないんだ、ということをはっきりさせる必要が僕はあると思うんです。不登校の問題というのは、家庭の問題、これが極めて重要な問題です。神経症の問題は親子の関係に機縁があるように、家庭の問題と教育の問題をどう関係を結んでいくかと。それを最後に非常にうまくまとめていただいたと思うのが、西濃学園の発表なんですけれども、地域についての発表で、あるいは西濃学園の場合は寮になっているわけですね。するとこれは西濃学園の教職の方が献身的にその生徒に働きかけることによって、あるいは村の行事と一緒に生徒が参加することによって、生徒がそこに心の居場所ができてくると。そして、その西濃学園というのは実に見事に不登校の問題として成功していると。ですからそういうことを考えると、今日の問題というのはそれなりにいろいろみんなが深く考えて、議論を深めていく問題ではないかな、と感じました。以上です。

司会:嶋野先生

はい。ありがとうございました。三校の発表をお聞きしながらですね、コメンテーターの先生方にちょっとお願いをしていたんですね。どこに着目されるんだろうか、と。これは私自身の興味でもあったんですけど、キーワードを端的に書いていただいたんですけども、かなり共通性もありますし、個別性といいますか、その方の考えが出ているものもある。あるいは表現上の問題ということもあるかもしれませんが、発表された三校の先生方はこのコメンテーターが着目したところに関して、どんな風に受け止められたか、お話を伺いたいんですけども、蓮田さん、西本さん、太田さんの順でお願いします。

星槎中学:蓮田先生

はい。ICTを活用するあたりのご紹介でしたので先進的という言葉いただきましたが、実際はやはりですね、江口先生の言葉にあったように、泥臭いというか、いかに子どもたちの先に立ちまわって、ひと手間ふた手間、ひと手間ふた手間も格好つけています、本当は百手間くらいかけていくわけですが、やはりそういったところがございまして、特例校制度の学校の特徴と言いますのは、かなり共通する部分があるかなと。ただし、やはり、先ほどの池田さん、すごかったですね、そういった部分をポジティブに表現していくというのは、われわれしっかりこだわっていかなければいけないかな、と思っており、そういったあたり

が先進的と表現いただいたのは良かったかなと。われわれはちょっと、わざとカジュアルにお話をしていこうかなとしましたので、そういうふうにご評価いただいたのは良かったかなと思います。

司会:嶋野先生

主張したいところをきちんと受け止めていただいたと。よかったです。では、西本先生、お願いします。

京都市立洛友中学:西本先生

はい。本校なんですけれども、先ほど、古田先生の方から言っていたように、この中でも公立の学校なんです。ですので、移動があったりして、それがマイナスになってしまう部分もあったりするかなと思うんですけれども、私、洛友中学校に七年間勤務しまして、いろんなこと、一般の学校ではわからないことをすごく吸収することができました。われわれ、公立ですので、特例校、子どもたちの居場所を増やすということで特例校の取り組みもどんどん進めていったらいいかなと思うその一方で、公立の教師として、全国に一番多く学校があるのは公立の学校ですので、公立の学校を変えれたらな、というふうに少しお話を聞いていて、自分にできることってなんだろう、この七年間で得た知識を一般の学校に広げていくこと、そういうことができたらいいいのかなと思いました。で、本当に今の公立の学校どうなんだろう、と改めて思いまして、特例校のやっていることってというのは、私、いろんな学校に足を運ばせてもらって、特例校であるとかフリースクール、毎年夏に行かせてもらってますけれども、変な言い方ですけども、学校らしい学校なんですね。特に驚くことではなくて、本当に先生が一生懸命生徒のためにやっている姿を見ることができんです。それをどうにか、今の公立の学校での取り組みに生かすことができないのか。学力というのも大事なんですけども、子どもたちが安全で安心して通える、そういう学校になればもっともっと不登校の生徒は減るんじゃないかなというふうに、今回このように参加させていただいて、こちらも発表をして、意見もいただいて、改めて公立の学校として何かできることがあるんじゃないかと、すごく刺激を受けました。どうもありがとうございます。

司会:嶋野先生

どうもありがとうございました。じゃあ、太田さん、お願いします。

西濃学園中学:太田

はい。私は、江口先生の不登校特例校の中でも、難しさを抱える子、というのは必ずいるのではないかと、という視点に考えさせられました。職員間の連携の質、として互いを活かし合えるという発想で連携を考えるようになってから、お互いに自分の枠組みで相手を

見たり、あるいは評価することが減っていったんですね。そういうふうに関わりを見ることができるようになっていく中で、生徒と向き合うときも、あるいは、連携の大事な相手として保護者の方を見るときも、教師側の枠組みで生徒や保護者の方を見るのではなくって、つまり自分の評価する視点に合わないからダメだと道具的に見るのではない、そんな見方を可能にしていくことが大事なんじゃないかな、と思うようになっていくところなんです。そして、生徒と向き合うところで、これは江口先生の研修の中でも感じることもなんですけれども、生徒が、子どもが生きている、ということそのものが、もうその子がすごく頑張っていることなんだ、というような視点に至ります。すると、ほめるところがたくさん出てくるんですね。今日はご飯食べとってえらかったな、というか、ご飯食べとってうれしい気持ちになったな、とか、そういうことから始まって、これは保護者の方と接するときもなんですけれども、一個人の人として認めて、一緒にやっていく、そう、一緒に生きていくという視点をもっと大事にするということを学ばせてもらえたらな、と思いました。

司会:嶋野先生

はい。ありがとうございます。ポスター発表の方でも、札幌の星槎はネガティブからポジティブに変えていく、というのがありましたけれども、今の太田さんの話も共通するところがありますね。枠組みを変えると、ほめるところがたくさん出てくる、というお話もあったんですけれども。

さて、発表のあった特例校の取り組みの着目された点が明らかになって来たんですけれども、先ほど、江口先生が引き出してくださった、今日の大きなテーマが、不登校特例校が拓く日本の教育、というところになっておりますので、不登校特例校というのは発表を聞いて、多くの知見を持ちまた創意工夫をしそして一定の成果を上げてきたと思うんですけれども、不登校特例校から日本の教育に視野を広げたときにですね、日本の教育は不登校特例校のどんなところをこれから活かしていくべきか。いま、京都の西本さんから、公立校をもっと変えなきゃいけないんじゃないか、というお話もあったんですけれども、この点について、意見交換をしていきたいと思います。日本の教育全体に関しまして、不登校特例校の知見を活かして、どう拓いていくことができるのか、という点です。コメンテーターの皆さん、どなたか、私からという方、いらっしゃいますか。じゃあ、松木さん、お願いいたします。

文部科学省:松木氏

はい。私、いろいろ取り扱っているものの中で、いじめ問題というのは非常に、本当によく相談も受けたり、批判もいただいたりするわけですし、よく学校の対応とか、教育委員会の対応が良くないんじゃないか、という批判もあるわけなんですけれども、やはり、チーム学校というんですかね、学校の組織的対応というのが本当にいまだにできていないところが多

いな、という印象があります。どうして、そうなっているのか、というのもあるんですけども、いかにして組織的に対応してもらうかというのが、いじめ対策では非常に中心的な課題になっています。一つには、やはり、よく言うのは教員の抱え込みというんですか、西濃学園さんの発表の中で、生徒のまるごとを引き受けるんだというところがあって、それは大事なんですけれども、それだけではだめで共有をはからないといけないわけなんです。熱心に向き合うという姿勢が最初に、子どもと向き合うときには重要なんですけれども、そこから子どもが教育を受ける環境の回復と言いますか、そういったものにつなげていくときにはしっかり組織的な情報共有と対応が求められると。それができていないと、子どもがいじめられているから悩んでいるか、というところでもなくて、一見笑っていたりするらしいんですよ。なんともないよ、とか言って。先生もそれを見て安心をしまして、でも、その笑顔の裏に絶望があって、それが重篤化していく、ということがよくあります。そうならないために、チーム学校というのは非常に重要だと思うんです。私が書いた三校のキーワードはいずれも重要なんですけれども、チーム学校というのは、その中でも割と非常に重要だと思います。不登校特例校が拓く日本の教育、と本日のテーマはありますけれども、どうやったら教職員の間でネガティブな情報みたいなものですね、子どもがこういうふうに苦しんでいるよというのを、共有できるチームをつくることができるか。担任の先生がこれ言ったら自分の力量が足りないと思われるんじゃないか、とかですね、そういうふうに思ってしまうと言えなくなってしまうのではなくて、そういうものを積極的に共有をはかって、子どものために組織として動いていくといったことが、全ての学校でできるようになると、もったいじめというのは減っていくんじゃないかと思っています。そういった意味で、このチーム学校の取り組み、というのは、非常に大きな可能性と言いますか、期待を感じているところでございます。

司会：嶋野先生

もっと、全ての学校でやらなければいけない、ということですね。池田さんの発表を聞いていましたら、いじめというのは相当あったようでしたよね。これを見ると、チーム学校というのがあって、太田さんはそこに連携、という話を入れましたよね。担任をしっかりやるんだ、と。担任に少し抱え込ませるんだ、というんだけど、しかし、それは連携の上で成り立っていくと。それを江口さんが、泥臭さから温かみ、というキーワードを出されているんですけども、これ、見事に関連しているんじゃないかな、というふうに思っているんですが、今の松木さんのお話をどのように受け止められたのでしょうか。まず江口さんから。

江口先生

いじめの問題というのは、本当に深刻になっていまして、私もある教育相談機関で仕事をしているんですけども、けっこうその依頼は多いんですね。ただ、その背景に、親御さん

が自分が子育てでうまくいっていないということを受け入れられない、自分の育て方は間違っていないと確信したい、そうするとどうしても外に責任を見出さざるを得なくて、そこがいじめへの過敏な反応となっていく、という現実はあると思いますね。ただ、学校の先生方もとても硬い反応をされますので、そこがモンスター化される親御さんの背景にあるのかな。その中間に入ることが私たちの仕事になっていますけれども、なかなか両方とも硬いので難しいことかなと思います。そういう意味で、先生方も先生方で必死なんです。たくさんの業務抱えて、そういう中でややもすると先生の責任を越えるものを背負わされてしまうという中で反応されちゃうのが現実かなというふうに思っています。

司会：嶋野先生

なるほど。古田さん、お願いします。

古田先生

先ほど、加藤先生が「最高の教育者はお母さんです」と言われて、そういえば、私、若い頃に『アメリカインディアンのお母さん』という加藤先生の本を読み、家庭でのしつけ、教育というのがいかに大切かということを PTA の席でえらそうに話したことが、加藤先生の本をもとにして、えらそうにしゃべったということがあったんですけども、やっぱり家庭ってとても大事な場であることは間違いないんですね。ただ、今、現実に虐待の問題などを見ていると、家庭が本当に安心できる場になっているかといったらそうではないところがいっぱい



あります。だから、学校は、家庭、しっかりしてよというふうに言えば済むのかと言えばそうではない、それだけでは済まない話となっています。では、学校に何ができるかと言ったら、家庭が安心できない状況だったら、学校が安心できる場になってやらなきゃいけないと私は考えています。学校が安心できる場になる、じゃなくて、学校を安心できる場にする、という気持ちがないと難しいだろうと思いますが、一方で、先生たちにも学校が、学校という職場が安心して勤務できる場になっているかどうかということ、これまたちょっと実際校長をやっていた立場から言うと、クエスチョンマークがいっぱいいついちゃうところがあります。それは何かというと、先ほど何度も出てきた言葉で言えば、先生がネガティブな言葉を職員室の中で吐きづらい、そんな雰囲気がある学校がやっぱりあります。うまくいかなかったんだよなとか、失敗しちゃったんだよなとかいったことを同僚にちょっと漏らせる、そういう職場でありたいなということを思っています。この特例校の実践を、ポスターも含めていっぱい見せてもらった中で、子どもたちに集団適応の力を付けさせるために例えば、ソーシャルスキルトレーニングをやるとかエンカウンターをやるとかグループワークとかピアサポートとかいっぱい言葉が入っていたような気がします。子どもたちにそういった力を付けていくと同時に、それって先生たちにも必要なんじゃないかなと私は今思っています。今、教員養成の立場にいますので学生たちに集団作りのおもしろさみたいなのを教えているんですが、できるだけ多くの学校でそういったことの研修をやってもらうというのも一つの手かなということを思っています。

司会：嶋野先生

はい。ありがとうございます。松木さんがきっかけを作っていただいて、チーム学校という一つになるという話があったんですけども、はい、加藤さん。

加藤先生

今日のテーマで、不登校特例校が拓く日本の教育、これは大変すばらしいテーマだと思うわけです。今、日本は子育て、少子化だ少子化だと騒いでいるけど少子化なのに不登校の生徒は増えているし、ドメスティックバイオレンスと言われるように子どもの家の中の暴力は増えている、母親の子どもに対する虐待は急増している。もう不登校の問題ばかりじゃなくて、先ほどいじめの問題が挙がりましたが、いじめの問題も増えて、いろんな問題が増えているわけです。いじめからドメスティックバイオレンスから不登校から引きこもりまでいろんな心の問題というのが増えていて、その中の一環として考えなければいけないだろうと思うんです。それで、先ほど発表を聞いていて、いいところに先生方は手厚い努力をなさってくれているんだなと思いましたが、コミュニケーションという言葉が出るか出ないかは別として、要するに、学力の問題じゃなくて、コミュニケーションの問題なんだと、ここがはっきりと理解できていないとこの問題、解決できないと思うんですよ。要するに価

価値観の問題として、学力があればいい子なんだとかそんなことじゃなくて、コミュニケーションが問題なんだ、と。これは不登校という、学校に行きづらくなったというその年代の問題よりも、結婚という次の段階でも一番の問題はコミュニケーションなわけです。アメリカには結婚問題研究所というのがかなりあるんですけれども、要するに離婚原因の第一は何かというと、不倫じゃないかと思う人いるかもしれませんが、不倫とかじゃないんです。第一の原因はコミュニケーションできなかった、ということです。つまり、ですから、学校がつらくて、学校に行けなくなった、学校で仲間とコミュニケーションできなくなったというようなことというのは、何もそのときだけの問題じゃなくて、日本全体の問題がそこにあるんで、そういう全体の日本の問題の一つとしてコミュニケーションが必要だと。ですから、先生方の間に新しい時代を拓くとすると、少なくとも価値観の問題として、生徒たちが学力が、成績がいいからその子は立派な子なんだという、そういう価値観がなくなっていくことがすごい大切なことだろうと僕は思っているんです。いじめだって同じことで、いじめなくそうだったってなくならないですよ。不満があったら人は必ずいじめますよ。家庭でいろんな不満を持っていて学校に来て弱い人がいたら必ずいじめますよ。いじめる人って言うのは、絶対に誰でもいじめるわけじゃない。いじめる人って言うのは必ず選んでいじめるわけです。あつ、こいつはいじめてもファイトバックしてこないな、それでいじめるわけです。ですから、欲求不満がある限り、いじめが悪いなんてことはいじめる側も知っているわけですから、そんなこと言ってみたからって、みんな悪いって知っているわけですよ。だから、現実に、ファイトバックする、そういう教育が必要。

それから日本の学校にお願いしたいんですけれども、あまりにも画一化、同じ箱ばっかり。僕、アメリカの中学校、高等学校の入学試験を調べるので、アメリカの学校を調べたときに、は一なるほどね、アメリカというのはこんな学校もあるのかと思って感心した学校があります。その学校には、わが校のモットー、リラックス、って書いてあったんですよ。どうやって勉強するんだ、と言いたくなるんですけど、それぞれの学校がわが校のモットーというのを書いているわけです。もちろん、わが校のモットー、と書いて、そこにコンペティション、これは例えば日本でいう名門校というアメリカの大統領を出すような名門校もあって、そういうところはわが校のモットーはコンペティション、勝って勝って勝ち抜くんだ、それがモットーなんだ、というところから、こちら側のわが校のモットーはリラックスというところまでが、たくさんあるわけなんです。ところが、残念ながら日本は、同じ価値観の学校しかないんですよ。同じ価値観の学校しかないから、価値観の序列化が、学校の序列化ができて、教育ママだか、教育パパだか知りませんが、そういう人が子どもをいいところに行かせようとする、子どもにまずコミュニケーション能力が無くなって、学校でうまくいかなくなり出す。ところが、西濃学園の場合は、その不登校の学生たちに寮生活をさせて、地域社会の中に溶け込んで、地域の行事に参加して、僕、何か西濃学園の理事長みたいなこと言っていますけれども、それで心の支えというものができて、不登校から社会に出て行くこ

とができるようになっていけるわけですね。ですから、今、不登校、不登校、不登校って言っていますけれども、時代全体はこの問題に振り回されちゃっている。これはもちろん、会社だってそうです。パワーハラスメントなんて言うのは大変な問題ですから。家庭ではドメスティック、学校では不登校、社会では引きこもり、会社ではパワーハラスメント、これ全部、心の支えのない人たちという、別の言葉で言うとコミュニケーションできない人たちなんですよ。だから、コミュニケーション、ここを解決するということがはっきり、しっかりとそこを認識しない限り、いくら先生方が、今日発表なさってくれた先生方がどんなに熱心な先生でどんなにやってくださったとしても、だからって日本の教育が拓かれるわけじゃない。むしろ、日本全体が今コミュニケーションの問題、これが本当に問題な時期になっているんだな、という理解をしなければならないし、そのことをうまく西濃学園というのがやって、現実の不登校の生徒さんが社会に出て行かれるようになっているわけですから、この例を持って日本の教育の制度というのは、このところが大切なんだな、というような考え方、つまり、コミュニケーション、そこらへんを日本を切り拓くためにはここなんだ、というところが大切ということを改めて今日の先生方の発表を聞いて感じました。

司会: 嶋野先生

ありがとうございます。加藤さんから、明確に二つ、柱が出たように私、受け止めたんですね。一つはコミュニケーションの問題、もう一つは画一化、同じ学校ばかりという問題。まあ、価値観が画一化しているという問題だと思うんですけども、これについて、例えば西濃学園では、学校の枠の在り方を変えて違いを出すという、カリキュラム・教育課程を変えて違いを出すという在り方と生徒へのかかわり方を変えて違いを出すという、この二つの方向が出されていたと思うんですけども、そういう方向性も出されながら、さらにここに江口さんからは、星槎に対しては、時代を先取りする教育だ、とおっしゃっているわけで、この辺もやっぱり多様化の方向も言っているのではないかな。個別最適化、というのもありますからね。それから、加藤さんから、西濃学園に可能性を求めて、という非常に未来性のあるキーワードをいただいているんですけども、こういう話をいただいてですね、どうですか、星槎の蓮田さん。

星槎中学: 蓮田先生

そうですね。まさにおっしゃる通りだな、とお聞きしておりました。先ほど、虐待の問題、いじめの問題、教員の抱え込みの問題なんて言うのもあったかと思います。これら全てですね、やはりいじめというのは他者との違いに対して脅え、それを肯定できないような心理で他者批判が起きたりするんだと思うんですね。また、虐待も、なんで他の子と同じようにできないんだろう、という他と同じでありたい、それが安心だ、ということで価値観がやっぱり画一化しているなど。そのことによって、多様な、あるいは他と違うことを認めていけな

いというところが、そこに脈々と感じられました。多様性、価値観が異なることを受け入れていく、というのが非常に重要で、加藤先生からも海外の学校に様々な選択肢があったなんというところもあり、われわれ不登校特例がそのような位置づけになれば、いいのかなあというふうに思っております。また、ちょっと先の話を考えますと、今日会場にいらっしゃる方は私と同年か、それ以上の方かと思います。私たちにとって、未来を象徴する言葉は、確か21世紀だったと思います。ところが、人生100年時代と昨今言われてまして、池田さんはともすれば、22世紀に生きる子どもたちなんですね。そのとき、どういったことが起きているかなあ、というと、やはり日本の人口が減っていくこと、そして世界の人口が増えていくこと、すなわちもう目の前にもう起きていますが、多様な国籍の方々が、外国人材の方々とともにこの日本で共生していくということが彼女たちの時代にはさらに現実になってきます。私たちもすでにコンビニだとかそういうところで、外国人材の支えによって暮らしているわけですが、そうするとですね、ほんのちょっと片付けられない、といったような違いというのは大した問題じゃないんです。今後、国籍、文化、言語が違う方々と一緒に日本を支えていくという意味では、やはり、もっと我々が柔軟になっていくこと、多様性を認めていくこと、これが必要なと感じております。ちなみに、星槎では、教員と生徒が守らなければいけない三つの約束がありまして、人を認める、人を排除しない、仲間を作る。我々が起因するところも帰結するところもそこですし、子どもたちもそのルールを守って生活するという中でやっていますので、やはり多少の特性の違いですとかは受け入れて、そういった状態にあることが将来、彼らが生きる時代においてはさらに重要になるのかな、というふうに感じました。ですから、やはり多様性という言葉は非常に重要であるかなというふうに感じました。

司会：嶋野先生

でも、その多様性というのは、今の三つの、人を認めるとか、それがあつての多様性の可能性とお聞きしたんですけどね、はい。あの、西本さん、公立ではですね、今ご提案あつた、コミュニケーションの充実の問題、それからもっと多様化しろ、と。画一化させるな、と。これ、公立で、可能性はどうでしょうか。

京都市立洛友中学：西本先生

コミュニケーションの問題に関しては、本校の生徒見てますと、やはり彼らを取り巻く状況としまして、インターネットの普及というのがものすごくコミュニケーションに関わっている部分は大きいなと思います。本当に、携帯をずうーっといじっている生徒がいます。本校は携帯電話を持ってくることは禁止はしていないんですけども、お守りのように携帯電話を持って、常に近くないと不安で仕方ない生徒もいます。我々もだんだんそうなっている気がしますね。携帯忘れたっていうだけで家に取りに帰ったりとか。それくらい

のツールになってきてしまっていますので、子どもたちを取り巻く環境というのは昔と本当に変わってきていて、ただでさえいろんなことをやらなきゃいけない中で携帯電話というツールからくる情報にも囲まれて、本当に苦しい思いをしている子どもたちもいるのかなと思います。

公立ということで、今日思うのは、この特例校というのは、何年も前から不登校の生徒をどうにかしようと一生懸命やってきた学校ばかりだと思います。本当に、エキスパートの学校ばかりだと思いますので、今後、こういう学校が必要であることは明確だと思うんですけども、この特例校に、一般の学校がどんどん学んでもらって、この特例校が日本の教育をけん引できるような存在になっていけたらなと思います。

司会：嶋野先生

不登校特例校のポスター発表を12校、僕もちょっとフロアで見せていただいて、発表も聞いたんですけど、僕なりの言葉で言えば、特例っていうくらいに実際にカリキュラムとか取り組み見ると、百花繚乱という感じなんですよ。江口さんにこれ、お聞きしたいんですけども、そういうふう非常に多様化して百花繚乱的にやっているのもであっても、まだ数パーセントの不登校は残ってしまう、ということもあるんですけども、その辺のところで、江口さん、何かお話しいただけますでしょうか。

江口先生

基本的には親御さんと子どもさんの持っている病理の深さ、先ほど加藤先生もおっしゃったように、やはり時代の進み具合によって保護者の健康度の低下というのが、かなりのあるかなと思っています。カウンセラーやっても、なかなかインサイト、内省までいかない、愚痴にもならない。ひたすら人の批判なんですね。人の批判をしている間は、やっぱり自分のところに行かない。その批判をずっと聞き続けるという忍耐力がカウンセラーにとっても求められている。そう思うとこれだけの攻撃性を自分の中で処理できない場合、おそらく家庭ではこれは全て子どもに垂れ流されてしまっているかな、と。当然それは、心理的虐待に近い状況にあって、その子たちが自分の傷を自分で癒す力がないから学校でいろんな問題にならざるを得ない。そういったことが連鎖して起こると、この子たちの魂の傷つき、って僕は思うんですけども、その子たちがどれくらいの癒しが必要になってくるかな、と思うと、それに見合うだけの公教育とか、特例校の教育の中で、果たしてそれがリーチできるかどうかというのが、必ずしも、できますよ、というのが私の中では言いにくいかなと。ただ、私たちができることは、その現実を見守る、見続ける、どこまでも他者批判を聞き続ける、それが今の私たちの役割なのかなと、そんな風に思っています。

司会:嶋野先生

ありがとうございました。癒しという言葉が出たんですけど、西濃学園の憩いの間っていうのは非常に大きな存在があるように思うんですけども、この憩いの間を作り上げるプロセスの中に、やはりこれから日本の教育を拓くメッセージみたいなものがあるような氣もしたんですけど、この辺はどうでしょう、太田さん。

西濃学園中学:太田

はい。憩いの間ですが、今、切り口の一つとしてコミュニケーションという言葉も出てきておりましたけれども、いじめにしても虐待にしても、ある意味悲しいコミュニケーションとも言えるのかな、というふうに聞いておりました。その自分を守るために他者を攻撃するあるいは他者を傷つけるというような、そういう風なコミュニケーションになってしまうとちょっと悲しいわけなんですけれども、そこに絡んでくるのは、やっぱり自尊心の問題であったり、その自己否定感っていうそういうふうには自分イメージできない問題が、どうしても必ず生じているんじゃないかなと思います。そういった自己否定感だったり、傷ついた自尊心が、憩いの間では、守られる。これ以上傷つけられなくて、しかも自分のペースで時間を過ごすことができ、そして常に何か見守られてる感じがある、例えばちょっとアピールすると何か関わってもらえるっていうような、そういう空間っていうところに憩いの間は意義を見出しているようなところがあります。

司会:嶋野先生

なるほどね。私ちょっとせっかちなところがありまして、今日のテーマからするとですね、やはり不登校特例校と言うのがこれまで取り組んできた、お持ちになっている知見、あるいは作り上げてきたそういう知見、これをどうやって活かせばこれからの日本教育を拓いていく手がかりになるのかと、そういうところにちょっと絞ってみたいと思うんですけど、こんなところは、っていうのは難しいと思うんですけども、いかがでしょうか。古田先生、何かございますか。

古田先生

直接的なお答えにはならないかもしれませんが、今、憩いの間のお話を聞きながら、じゃあその西濃学園のその憩いの間にあたるものが一般の学校にないかという、必ずあるんですよ。保健室であったり、相談室であったりする、そういうところはあって、そういうところっていうのは本来、子どもがちょっとほっとする場であったり、不安や不満を漏らしたりする場、なんだけれど、もちろん保健室がそのそういう場になってしまうと、保健室の本来の意味がなくなるので、保健室登校っていうのはなかなか難しいかもしれないんだけど、相談室っていうのはそもそもそのために作られているはず。だけでも活用されて

いるかっていうとちょっと疑問なところはありますし、そこできちっと話を聞いてくれる先生が本当にいるのかは、まあ、先生じゃなくて相談員であってもいいんだけど、そういう存在があって、だからそこへ行くことが自分にとってはいわゆる癒しになる、というふうになってるはずなんだけどなあ、というところです。

司会：嶋野先生

なるほど。形としてはあるってことですよね、今も。公立校にも。保健室だったり相談室であったり。しかしそういうところもうちょっと見直して、例えば西濃学園が作ってきた憩いの間って、あれプロセスがありますよね。形を作っただけではないですよ。プロセスがあるので、あの辺りに一つ大きなヒントがあるのかなって感じがしますけれどもね。江口さん、どんなところから切りこんでいければ、これからの教育を切り拓いていくというキーワードになるのでしょうか。

江口先生

ちょっと違う話をしてもいいですかね。つい最近ですね、いわゆる不登校の子たちの適応指導教室っていうのがあるんですね。その適応指導教室のその先生方に対して話をしてほしいって言われて、大まかにこんな話をしたんですね。子どもたちが適応指導教室に来るときのその優先順位として、一番は生存確認、生きているかどうか確認できる。二番目はそこに毎日来ることで生活のリズムができる。3つ目は親御さんを毎回毎回送ってきてくれてありがたいって、励ますことで親子関係が良好になる。そして同じその教室で出会った子どもたちが友達となって人間関係が広がる。こういったことを優先順位として一、二、三と挙げていけばいいんじゃないか。教育するっていうのはもっと下の方でいいんじゃないかっていう趣旨の話をしたんですね。それは事前に送られたアンケートの中に、どうやったら教えられるかとか、発達障害の子がいるからその子が勉強を邪魔するから、どうやったらその子来ないようにできるかとかですね、そういうアンケートばかりだったんですね。そこに僕は反応して、教育、教えるっていうのはもっと後でいいんじゃないかっていう発言をしたんですね。そうしたらその会場に来られた一人の先生が、立ち上がられてですね、子どもたちは教えてもらいたがってるんだ、教えることが教師なんだと、こう大きな声で叫ばれたんですね。その時に、ああ、先生なんだな、先生っていうのは教えるってことに価値観を見出しているんだな、教えることにアイデンティティを感じているから、教えない教師なんてありえない、というのを感じたんですね。この不登校特例校の共通項は、多分教えるというよりは、共にあることを先生方は目指してみえてるんじゃないかな。その価値の転換がどう伝わっていくか。今日は、たくさん先生方見えていると思うんですが、果たして教えないで教師として成立するのかっていう疑問を皆さん持っていると思うのですが、そこが一つのきっかけにならないかなって思っています。

司会:嶋野先生

なるほど。手立ては多様にありそうですね、本当に。でも何かいまのお話ですと、いわゆるパラダイムっていうか、価値の転換っていうか、こういう問題が大きいのかもしれないって受け止めたんですけれども、松木さん立場上お聞きになってですね、この不登校の特例校のいろんな知見をどんなことで活かせるんじゃないかっていうメッセージありますか。

文部科学省:松木氏

はい。私は例えばいじめの関係で行政説明っていうのを年間 35 回やっているんですけれども、学校の校長先生とか教育委員会の関係者とか、その地域ごとに集まってもらって私とかあるいは課長が説明するわけですね。そのときに、組織的対応が重要ですよとか、チーム学校が重要ですよとか、言って、多分それ自体は理解してもらえるんですけれども、多分多くの学校関係者が悩んでいるのは具体的にチーム学校って言われてもどうしたらいいのかっていう具体的方法論だと思います。今日私が挙げた個別最適化にしろ、子どもの尊厳の尊重にしろ、チーム学校にしろ、それぞれ簡単ではないと思うんですね。それを具体的にどうやっていったらいいのかっていう知見がやはり学校現場に示されることが重要だと思っていまして、そういう面では不登校特例校っていうのはまさにこうそういう分野で、先進的な部分を発しているのかな。普通の学校にはないメリットと言うとやはり先生の一人当たりの生徒数が少ないというところですね。どうしても一クラス 30 人 40 人というところですね、忙しすぎて手が回らないみたいな現状があると思うんですけれども、不登校特例校ですと、そこを丁寧にですね、専門家の力を借りながら、ノウハウを蓄積できていると思います。それをこのやり方すごくいいなと思ってもらって、他の学校にも取り入れていくっていうのが地道なやり方ですけれども、そういったものが広がっていくことがやはり改善につながるのかなと思っています。要するに具体的事例ですかね。子どもにどういう言葉をかけたらいいいのかとか、そういったところも分からないと思うんですね。昔から自分のやり方に馴染んでずっと教員生活を送ってきた先生とかは、多分自分のやり方が身についてしまっていて、そこを変えろって言われても難しい。具体的にどう変えるんだって言われて何も提示できなかったら多分何も変わらないと思うんですね。そこを具体的にこうやるんですよっていったようなことを示して、実際不登校特例校で、不登校だったお子さんが最終的に自立できましたっていう、そういう事例もいっぱい出てきて、それは良いですねって、段々広がって行くとエビデンスの蓄積と言いますか、そういったものがゆくゆくは日本全体の学校の改善につながっていくのかなって。すごく冗長な話かもしれないですけど、今すぐ何かこうやればぱっとすぐに問題が解決するっていう特効薬はないと思うので、地道かもしれませんがそういったところを積み重ねていくっていう努力がやっぱり一番いいのではないかな、と思っております

司会：嶋野先生

なるほど。チーム学校とか個別最適化とか、こういった概念的なものは出るけれども、実際に取り組みは非常に個別的でしかも具体的で、そこのところに目を向けていかないと、すぐ自分の学校に活かせるとはいかないということでしょうかね。非常に取り組みっていうのは非常に個別的で、具体的ですよ。そういうところをやはり見ていかないといけない。ただ言葉でくくるわけにはいかないんじゃないかっていう。そういう意味で今日の報告会というのは非常に参考になるんじゃないかと、思いますけれども。いろいろご意見をいただいていたんですが、残り時間が残り15分くらいになっているんですね。ここでせつかくのところなので、加藤先生10分くらいこのテーマについてお話を伺えますでしょうか。

加藤先生

先ほどの話と似ているんですけども、僕は価値観の問題で、不登校の学生、生徒さんが実際に学校に行けて、卒業して、社会で働けるっていうことは、これは心理的にいうものすごい成長なわけですよ。こういう人間が成長するっていうことは、本当にこれが生きることの価値なんだっていうような、こういう価値観が日本の中にはないですよ。やっぱりどっかにそうやって成長していくって、こんなにすごいことなんだっていうよりも、別の価値観というのがある。ですから、例えばアメリカが良いっていうわけじゃないけど、例えばアメリカの、こういう風にして大学に入ったっていう人がいるんですけど、私は高等学校のときにこういう風に不良だったとか、いろんな事やってたけれども、こういう風にして立ち直りましたということを書いて、そしてそれを大学が受け入れてくれたっていうことがあるんですね。例えば、大学の入学試験一つ取ってみても、われわれの日本人の価値観とは、もう全く違うわけですよ。どこが違っているかという、よく言われるように、日本の大学は入るのが難しいけれど、出るのは優しいと。アメリカの大学は入るのが優しいけれども、出るのは難しいと。これがもう全く価値観なんですね。どういう価値観かと言いますと、例を上げると、ベルモットスクールという学校からハーバード大学に全員落ちたんです。成績一番の人も落ちました。ところが成績一番の人が落ちたんで、みんな落ちたと思っていたら、成績が本当に悪い人が受かってたんです。だから、アメリカの大学は入るのは優しいって言う。だけど、これ価値観を変えれば、東大なんてこんな優しいところないですよ。成績さえ良ければ入れるんですから。こんなの笑い話みたいですよ。成績一番の人が落ちてるんです。だけど成績がもっともっと悪い人が入ってるんです。これは、ハーバード大学の価値観があるから。自分たちの価値観で入学生を選んでいる。だからさっき、僕は、価値観の問題と言いましたけれども、人を評価するときに結果で評価して、過程で評価しないという、この評価をどうしても変えてもらいたいというのが私の意見です。結果でなくて過程で評価してもらいたいっていうのは、不登校だった、学校に行けない、これは大変な苦しみですよ。家でお父さんとお母さんが不仲。心の居場所がない。そういう中でまともに生活、成

長していけないのにもかかわらず、一生懸命だったけれども、やっぱり学校に行けなかった。けどいろいろプロセスがあって、今は社会の中で一人で生きていくことができているという、この成長っていうものを、これは結果じゃなくて、過程を見てほしい。たとえ、その人の今入っている会社が大きな会社じゃない、明日つぶれるかもしれない会社かもしれない、けれども、そういう会社でもとにかく社会の中に入っていけたというその人の成長ですね。自分はこんな苦しい厳しい環境の中でもとにかく頑張ってここまで生きてきた。そういう人たちをきちんと評価する。ところがそうじゃなくて、たかが成績が良いだけで、入れるところがものすごいことのようになっちゃてるわけですよ。現代の評価っていうのが。けどすべての結果には過程があるわけです。だから結果思考でもって考えるんじゃなくて、過程思考で考えて、不登校ばかりじゃなくて、今の日本人だって、先ほどの話にもちょっと言いましたけれども、虐待されて成長する子もいれば、励まされて成長する子もいれば、いろんな環境で成長する子どもがいるわけです。虐待されて成長する子と励まされて成長する子がやっぱり、一生懸命頑張って、虐待される子がここまでになった、励まされて成長する子でもここまでなつた。それで、その人間としての深さっていうのかな、立派さっていうのかな、そういうものをもう少し評価してもらえたら。そのことはどこでコミュニケーションと繋がるかっていうと、要するに、今言ったように虐待されながらも何とか生き延びて頑張ってまともな人間になれたっていう、そういうその人って言うのは、自分の潜在的能力を精一杯使って生きてきたわけです。だから自分の潜在的能力を精一杯使って生きてきたっていう人は人と繋がります。人の上に立とうとしないから、人と繋がります。これは潜在的能力を発揮する努力とコミュニケーション能力というのは関連しているはずなんです。ですから、価値観として成長という視点を持つ。おそらく不登校になる子、引きこもりになる子はいろんな、過去に辛いことがあるんだろうと思いますけれども、その辛さを乗り越えてきたというところに、きっちり社会の側が拍手を与えると。それは不登校ばかりでなくて、先ほど言ったDVからパワハラに至るまで、もう日本の今、心理的状态はもう散々、惨憺たる状態ですよ。その惨憺たる状態の中でも、そういうような価値観に、われわれが気がつけば、まさに日本の教育を拓くことになるんじゃないかなと言うのが私の考えです。

司会:嶋野先生

ありがとうございます。私だけでしょうか。なんだかすっきりした気がするんですけど。今回明らかになったのはこの価値観という問題ですよ。これが非常に重くのしかかっている。いかにこれ多様化して、多様化するだけでなく変えられるかっていう問題なんだと思います。加藤先生のお話を聞いていると、例えば具体的に何をどう変えるかっていうのは、例えば結果ではないよ、過程で見るようにする価値観にしようとか、あるいは成績じゃなくて成長っていう価値観で見たいこうとか、あるいは人間としての深さっていうので見るのであって、できる・できないで見るだけじゃないよっていうのとか、示されたと思います。

価値観というのは、いろんな視点があるんだろうと思うんですけど、突き詰めてみると今日クリアになってきたのは、価値観の問題が、これから日本の教育を開く上で非常に大きなものになってるんじゃないかということでした。登壇されてる皆さん、今までのお話も含めてですね、今日どんなふうにお聞きになったか、時間がないんですけど、一言ずつお話いただけないか思います。今度は太田さんからいこうか。こちらから順にお願いします。

西濃学園中学:太田

価値観そして多様化という言葉が出てきましたけれども、不登校っていうイメージというのも、よりその子どもたちが悩んだっていうことをもっとポジティブに捉えて、不登校のイメージっていうことも多様化していくと、価値観が変わるんじゃないかなと思います。

京都市立洛友中学:西本先生

私は公立の学校の代表として話をさせていただきますと、本当にこういう会に一般の学校の先生が来てくれたらいいなと思うんですけども、本校には、視察とかいっぱい受け入れてるんですけど、ほとんどが同じような学校同士の付き合いが多いんですね。例えば、西濃さんとか、星槎さん、一般の学校が来るってあんまりないと思うんですけど、その辺が一般の学校と交流ができていったら、この特例校がやってることを本当に見ていただきたい。それができるようになれば、不登校の人数は減っていくんじゃないかなって、今日そういうふうに思いました。ありがとうございました。

星槎中学:蓮田先生

私も太田先生と似たようなところになるんですが、彼らって、もちろん背景だとか、かんがみるところがあるんですが、ずっとかわいそうな子なわけじゃないです。あれだけ力があって、あれだけ伸びしろというか、持っている宝がたくさんありますので、やはり先ほどの不登校って見え方、考え方っていう価値観も変えたいですし、そもそもそれらって、全て社会の側がですね、彼らに蓋をしているようなところもあるので、不登校特例制度を使ってですね、その社会の蓋をどんどん外していきたいなと思っています。今回12校ですが、13校14校とどんどん増えていくように聞いておりますので、これらがワンチームになって、いろいろ、こう、蓋をひっくり返していけばいいなと感じました。ありがとうございました。

江口先生

何よりここに来ていいなって思ったのは、先生方の発表を直接聞けた、肉声で聞けたっていうのが一番いいなあと思いました。

古田先生

特例校でもなく、そして公立校の代表でもない私はどうしてここに座ってるんだろうなと思って聞いていたんですけど、特例校ではなくても、今自分がいる学校でできることってきつと、今日の発表の中から見つかったんじゃないかなって思っています。それをぜひお土産にしていきたいなと思っていますし、私自身も、それをこれから学生に伝えていくのが務めかなと思いました。ありがとうございました。

文部科学省:松木氏

不登校については私も様々な方と意見交換したり、話を聞いたりしますけれども、見事に価値観が二分されているように感じます。不登校っていうのは要するに子どもが昔と比べて弱くなっているんじゃないかみたいな、否定的な見方をする人と、いやそうじゃない、やはり休養が必要な子にはしっかり休養させるべきで、そういう子を無理に登校させるのはよくないんだっていう、不登校を必ずしも否定的に捉えない方といてですね。この価値観というのがやはり段々変わってきてはいます。新しく法律もできて、やはりそういう休養が必要な子にはしっかり休ませようとかですね、そういう理解は浸透してきていると思いますけれども、やはり急には変わらないというふうに私も感じております。ですからこういった特例校の優れた取り組みっていうのを、こういったシンポジウムもそうですけれども、世の中にいろいろ衆知をしていくことで、理解を少しずつ浸透させていくと。特に 40 代 50 代の頭の固い学校現場の方とか、考え方を変えないような人もいるんですけど、要するに自分たちの指導でうまくいっているので何で変えないといけないんだって言う人もいますね。ですから昔ながらの厳しい校則の中で、バチバチに規律を固めてしまっているという学校も残念ながら残っていたり、そういったところで子どもたちも昔と今で実際に変わってきているし、学校も変わっていかなくやいけないなっていうのを理解してもらわなければいけない。残念ながら一気にには難しいんですけど、そういったところにわれわれ文部科学省としても、いろいろな企画を通じて、働きかけれたらと思っています。

司会:嶋野先生

ありがとうございました。あっという間に時間がきてしまったんですけども、僕、ここへこういう立場に立たせていただいてですね、最後に残っているのは、今日のこの日がこれからの教育を変える大きな転換点になるんじゃないかと、いくつかの点で思います。一つは参加者の皆さんですよ。先ほども公立学校の先生はいらっしゃるか西本さんおっしゃったんですけど、ここには議員さんもいれば、まさに教育長さんもいれば、教育委員会の方もいるし、それから館長さんや主事さんや区長さんもいるし、あるいは青少年育成委員の方もいるし、小学校の先生方もいるし、小中学校の先生方、本当に多様なんですね。こんなに多様な方が一同に会って、一つのテーマで場を一緒にするってあんまりないんじゃない

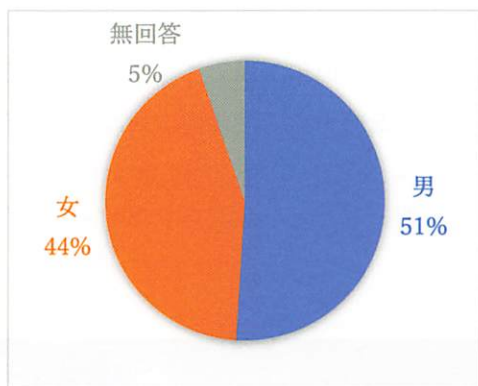
いかなっていうふうに思います。それと不登校特例校も全部の12校ですよね。これが全部参加して一同で皆さんやられてると。これもめったにないことなんじゃないか。東京でやることはあるかもしれませんが、これを掛斐川町で全国的なものをやるっていうのも画期的なことだろうと思いますし、そういうもろもろの意味ですね、大きな節目になった会じゃないか。一重にこれもですね、西濃学園さんが、多分これ何年か温めてきた企画ではないかなと思います。本当に真摯に取り組んで、計画企画実施された、最後には西濃学園さんに深く敬意を表したいと思います。少し時間が過ぎてしまいましたけれども、今日のシンポジウムを終了させていただきたいと思います。皆さん、拙い司会で申し訳ありませんでした。ご協力ありがとうございました。終わります。

	星槎中学	京都市立洛友中学	西濃学園中学
加藤氏	・教育は愛情 ・ダブルスタンダードにしない	保護者 個別指導	・可能性を求めて ・寮生活
松木氏	個別最適化	子供の尊厳の尊重	チーム学校
江口氏	時代とを取りする教育	昼間・夜間の 交流が生む 共育	泥くささからあたたかみ を感じられる
古田氏	個別の指導計画と 記録の蓄積	公立学校～教員の異動 夜間中学併設(野崎学園)	寮生活～家庭生活の見直し 連携(すべての職員専門性)

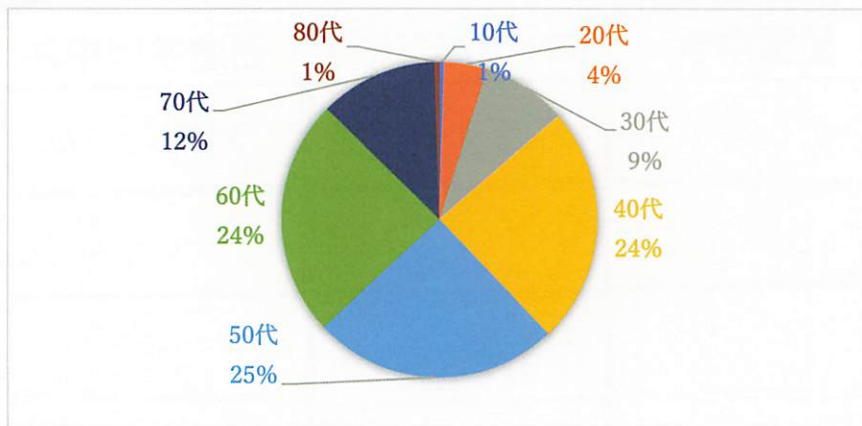
2019 教育実践報告会 来場者アンケート集計結果

来場者数 395 名（西濃学園職員含む）・アンケート回答者数 206 名

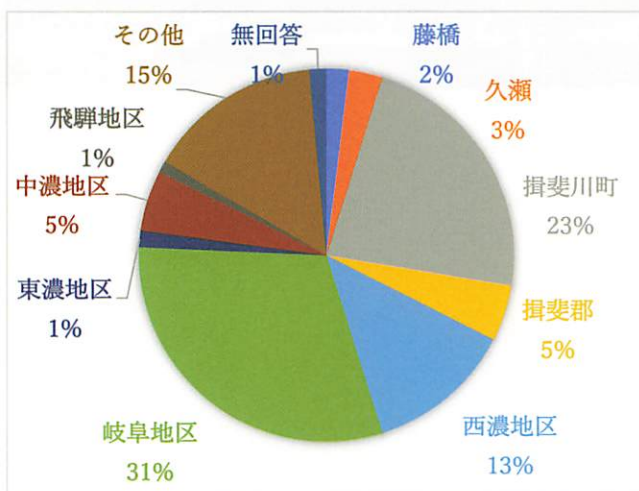
1 来場者の性別



2 来場者の年代



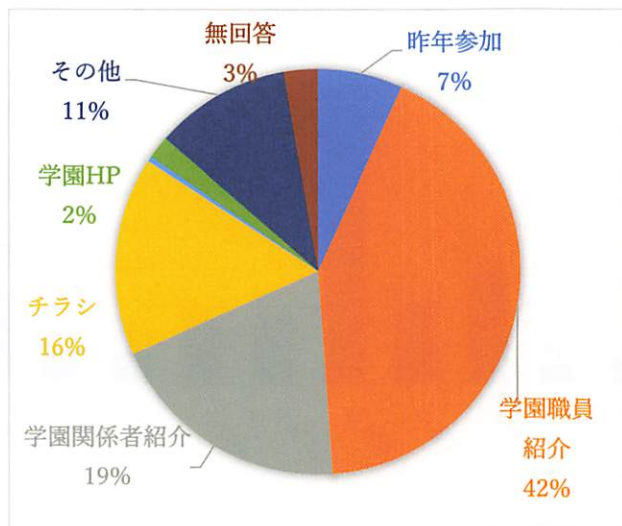
3 来場者の住んでいる地域



<その他>

- ・東京都・神奈川県（横浜市）
- ・愛知県（名古屋市・豊田市）
- ・三重県・静岡県
- ・京都府・兵庫県（加古川市）・大阪府
- ・鳥取県・広島県・岡山県（井原市）
- ・九州

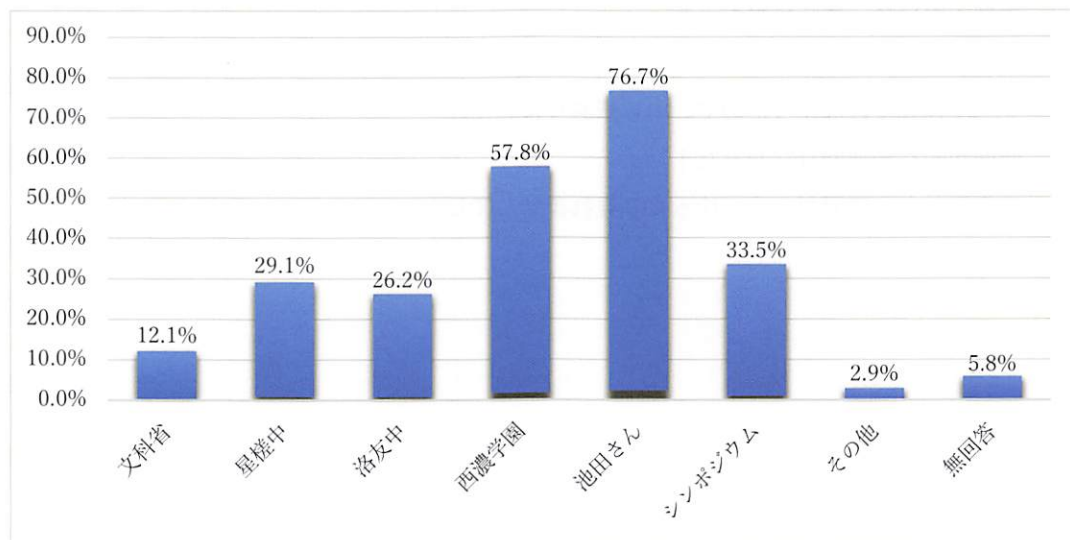
4 報告会を知ったきっかけ（複数回答有り）



<その他>

- ・友人からの紹介
- ・Facebook
- ・教育委員会
- ・藤枝市教育政策課
- ・NHK ニュース
- ・上席からの紹介
- ・職場から
- ・いび幼稚園園長より紹介
- ・校長より（勤務校から）
- ・大学
- ・メール

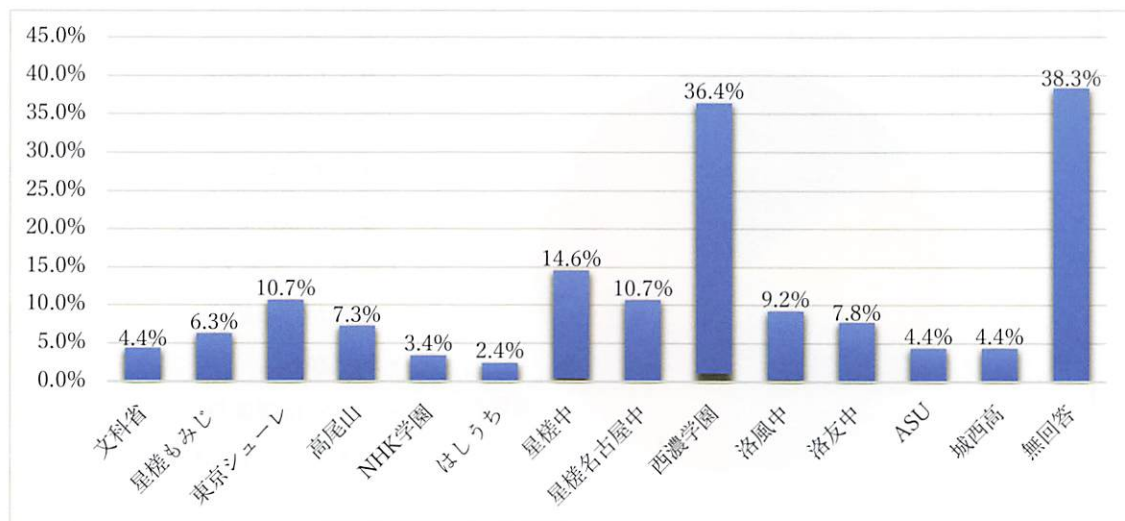
5 印象に残っている発表（複数回答有り）



<その他>

- ・最後の主催の方のお話
- ・閉会の挨拶
- ・加藤先生のお言葉
- ・加藤先生、古田先生の言葉。説得力がありました。
- ・江口先生の泥くささ、あたたかみ
- ・遅刻しました。残念です。

6 印象に残っているパネル発表（複数回答有り）



- ・ すべてが個性化教育ですばらしい。

<無回答の理由>

- ・ 時間がなく、十分見られなかった。
- ・ 大勢人がいて、見られなかった。
- ・ 人がいっぱいで見れませんでした。
- ・ すべて拝見できなかったの。申し訳ありません。
- ・ 時間が短く全部回れなかった！
- ・ すみません。時間がなくてゆっくり見れませんでした。

7 職員・高校生の対応について（原文のまま）

高
校
生
に
つ
い
て

- ・ 声を出して対応ご苦労様でした。
- ・ 高校生の礼儀正しく誠実な対応に自立心が育っていると感じました。
- ・ 礼儀正しく良い対応ができています。
- ・ 「お茶をどうぞ」とあたたかく声をかけていただきました。
- ・ さらに受付の高校生がさわやかな笑顔で対応してくださったことが心に残りました。心の状態は表情に現れると思うので「今の自分を好きなんだな」と感じました。
- ・ 明るく堂々とした生徒さんばかりでなく、恥ずかしそうにオドオドとお茶をくださった生徒さんの参加されていることで、成長を祈りますし、努力の途中と嬉しく思いました。
- ・ とても落ち着いた雰囲気と笑顔でよかったです。
- ・ 「お茶をどうぞ」という子供たちの大きな声が印象的でした。自己への自信の表れを感じました。
- ・ 緊張しながらも積極的に挨拶や案内、お茶の配布などしてくれたとき、本当に心温まり嬉しく感じました。
- ・ 受付やお茶配りの生徒さんがとても気持ちの良い対応でした。一度、学校での様子を見せたいと思います。
- ・ 大変うれしいお心遣いでした。
- ・ 「関わろう」としてくれる高校生のまっすぐな目が印象的でした。
- ・ （高校生）丁寧な声かけをしていただきました。
- ・ 丁寧な対応、言葉遣いに感謝します。
- ・ 高校生の生徒さんはとても緊張していましたが、誠実に対応してくださいました。
- ・ 高校生の皆さんが明るく挨拶してくれてよかった。



高校生について	・ 受付で、目を見てパンフレットをくださいました。優しく、そしてやりがいを持っていて、生き生きとした眼差しでした。 ・ 両手で丁寧に茶をお茶を手渡してくれた。西濃学園の生徒さんの優しい心遣いを感じました。 ・ 大変丁寧でした。 ・ とても元気良い、気持ちの良い挨拶で迎えていただきました。強くたくましく、優しい素敵な高校生ですね。 ・ どの先生、生徒の皆さんも笑顔で丁寧に対応していただきました。 ・ 成長していてうれしいです。 ・ 周りに気を配り動いてくださる姿がうれしかったです。 ・ 誠実に対応していただき感謝しています。 ・ 受付や案内など、丁寧に対応していただけてありがたかったです。 ・ 丁寧な対応、優しい対応で過ごしやすかったです。 ・ 暖かく、とても丁寧な対応でした。 ・ お茶の声をかけていただきました。 ・ みなさんからよく気遣いをしていただきました。 ・ 生徒が誇りを持って行動していた（むしろ普通校の子よりも） ・ いろんな子がいてよかったですよ。お疲れ様 ・ 高校生が大きな声で挨拶してくれたり、お茶を渡してもらえてありがたかったです。 ・ 気持ちの良い対応をしていただきました。 ・ 丁寧に接遇していただき、嬉しい思いでした。 ・ 受付にしろ、すべてのお手伝いを進んで係を決めて行動している姿に感動しました。 ・ 心のこもった御対応嬉しく思いました。 ・ 大変親切な対応でした。 ・ たいへん心配りを感じる対応でした。 ・ お茶はいかがですか、と声をかけてくれた生徒の物腰にとっても好感がもてた。舞台上でテキパキ動く子たちも印象的でした。 ・ 温かい対応ありがとうございました。 ・ 丁寧に対応してくれました。ありがとうございます。 ・ 笑顔で迎えていただき、とても気持ちよく本会に参加（入場）させていただきました。 ・ 皆さんの姿からも西濃学園の良さを感じられました。 ・ 中学の時に関わった生徒さんが元気にボランティアをしていてとても嬉しく感じました。 ・ 気持ちの良い生徒たちで嬉しかったです。 ・ 大変心配りのある対応でした。 ・ 心配りのある対応でよかったです。
---------	--

池田さんについて	・ 今日までの取り組みありがとうございました。少年の主張すばらしかった。心に刺さる発表でした。その子にあった速さで子供は成長していると改めて考えさせられました。 ・ 池田さんの主張、姿を大変カッコいいと思いました。胸を張って生きる姿は不登校の子供たちを一番勇気付けると思いました。 ・ 自信を持った堂々として発表でした。生徒は礼儀正しい！
職員について	・ 先生が親身になって話を聞いていただきました。 ・ 不登校の生徒さんに情熱を持って取り組まれている姿に頭が下がります。 ・ みなさん温かい対応でした。駐車場係の方に親切に対応していただきました。ありがとうございました。 ・ 準備、運営ありがとうございました。 ・ 心遣い感じました。先生方に頭が下がります。
改善点・要望	・ コメンテーターはもっと様々な人をお願いしたほうがいいのでは？ ・ 会場が暗すぎてメモを取ることが困難であった。 ・ 会場が寒かったり、少し暗すぎたように思います。 ・ 会場内が暗かったので、メモが取りにくかったです。 ・ 受付テーブルへの案内係が必要だと思いました。
感想	・ 改めて不登校生徒との関わりを考える機会になりました。ありがとうございました。 ・ 不登校生については、自分がその立場（本人、家族も含めて）にならないとその苦しみや思いを理解するのは難しいと思います。たまたま私の子供もそういう経験をし、私も教育関係の仕事に就いていてとても励まされる報告会でありました。 ・ とってもあったかい雰囲気でした。大きな会ですが、良い意味で肩の力が抜ける感じでした。 ・ これまでも西濃学園の実践について頭が下がる思いでした。本日更に更に応援したくなりましたし、今、自分の置かれている立場でできることを実践しようと思いました。価値観、コミュニケーション力、組織力、磨きたいです。池田さん、他の生徒さんの今後の活躍に期待しています。 ・ 存在を知って、通える子供たちが幸せだと思いました。一生懸命に子供たちに関わる先生の存在を知られて嬉しかった。

8 今後、どのような企画の報告会を希望されますか？（原文のまま）

学校 関連	・ ぜひ一般校とのつながりを！岐阜市の特例校を作る教員の研修の場になるといいなと思います。チーム学校であるために。 ・ 今回の発表で自律学習選択（不登校）をする児童や受入校に興味が増し、西濃学園の取り組みの理解度が増しました。今後は学校の個別の取り組みを多く発信していただける機会を増やしていただきたいと思います。 ・ 各校の取り組みを今日のように大まかに発表されたが、各校が蓄えられたノウハウやハウツーの具体を知りたい。 ・ 報告会の観点が、発表される学校3校が同じだと良いと思います。例えば不登校特例校からみた学校教育についてとか、不登校特例校が抱える問題点（シンポジウムではなく、各校の立場から提言していただけると良い）、子供の視点、教員の視点、保護者の視点から見た問題点など。改めて支援・指導のあり方を考える機会となりました。 ・ 公立小中学校の不登校の取り組みについて ・ 文科省からは20万人を超える不登校生の将来についての展望、特例校制度の今後について。特例校からは具体的事例を踏まえて。一般の中学校からの転校のステップの具体について知れる機会があるとありがたいです。 ・ 今後も課題と取り組みについて続けると良いと思う。 ・ 西濃学園で積み重ねている研究を発表する。それがいいと思います。 ・ 全国の各学校の具体的実践をまたお聞かせください。今回のシンポジウムに参加させていただきまた明日から学校現場で子供たちのために職責と共に頑張ろうとお力をいただきました。 ・ 大変勉強になりました。一般の学校においても不登校が増えている中、全ての学校で取り組むべき視点がたくさんあったと思います。 ・ 特例校のノウハウを普通の学校に移植できるノウハウ報告会。 ・ 寮生活こそその良さ、効果。児童自立支援施設との共通点もすごくあるように思います。 ・ また同じものでも毎年変化があると思うので。 ・ 3校以外の実践についても聞いてみたかったので、分科会のような形で少人数で深くお話が伺えるといいなと思います。 ・ 今日の洛友中のお話にもあったように、特例校と学校との接続の実際を知りたいです。 ・ コミュニケーションの大切さ、学校のあり方、多様性の大切さ ・ 不登校の生徒が普通学校に通えるようにするにはどうしたら良いか。特別学校に通いながらいづれは普通学校に通わせたい。 ・ まだまだ周知が必要な時間が必要であり、今年度の方でよいのではないかな。
------------------	---

学校 関連	・ 教師の意識変革と大学の生徒育成の価値観の変革 ・ 特例校の取り組みがわかりました。H29.4 にできた法律「義務教育の段階における教育に相当する教育機会の確保等に関する法律」は通常の学校がもっと取り組まなくてはならないことだと思います。今日の話題に出して欲しかったです。特例校の実践が通常校に発信できると良いと思います。子供は育つ「育つカテイ」に価値を置くこと。 ・ 今後も熱い先生を集めていろいろな事例を教えて欲しい。 ・ 公立の学校関係の方々にも、もっと聞いていただければと思いました。 ・ シンポジウムはとても面白かったです。公立校の代表者をパネリストにもう少し入れて本音の部分もたくさん聞けるとよかったですと思います。価値ある取り組みを広めていただき、本当にありがとうございました。 ・ 一般の学校でも生かせること。一般の学校への改革案のようにご経験から一般化できることの特集。 ・ 特例校の紹介をもう少ししたほうが良いのではと思います。 ・ シンポジウムの時間が長かったので、もう少し各学校の紹介等が長くてもいいのではと思いました。 ・ 文科省と現場の先生とのパネルディスカッション→不登校、いじめ ・ 一般の公立校の相談室のあり方や取り組みなど。
生徒 保護者 関連	・ 生徒さんからの声も聞けるといいです。 ・ 生徒さんの声が聞けるとうれしいです。 ・ 学校側だけではなく、保護者、生徒の声がリアルにわかる報告会に参加してみたいと思いました。 ・ 初めて参加させていただきましたが、池田さんのように生徒の声、活躍している姿を今後続けていただけると良いと思います。 ・ 西濃学園中学校、子供たちの様子を実際の校舎で公表いただけたら、ぜひ参加させていただきたいと思います。子供たちに寄り添い、自信を取り戻し、また社会で活躍できる力を身につけていっていると思いました。通常の公立中学校も（こそ）学ぶべきところが多かったです。 ・ 実際の学校生活や教育実践に触れられるような報告会が実現できればと感じます。 ・ 池田さんの発表、堂々としていて素晴らしいかったです。そんなお子さんたちの発表が見てみたいです。 ・ 意識していない子供たちの動き、掃除などの手立てにヒントがありそうなので聞きたい。 ・ 不登校の子を持つ親も同様に苦しんでいるのでその点にも触れるとさらにいいかと思いました。

その他	・ 不登校はなぜ増えているのか。①親の責任→もちろん大きい。これはよくわかっているつもり。だが、それだけか？どの家庭も自分たちなりに努力している。そこを否定されるのはいたたまれない（こういうこと言っているからダメなんですかね・・・）。②中学校教育のあり方、③社会の責任 スクールカーストというものがなぜ存在してしまうのか。
改善点 要望	・ 会場がもう少し明るいとうれしかった（特に前半。もう少しメモを取りたかったのだ）。冒頭の議員が池田さんの発表の内容について話しすぎたのが残念でした。 ・ 小学生で集団に馴染めない児童が行ける学校があったら教えていただきたいです。 ・ 職員の人数がわかるとありがたいです。
感想	・ 北浦園長さんの理念に人が集まり、社会が動いていることに教育者の一人として感動しています。 ・ とても勉強になりました。もっと多くの小中の公立私立の教員が知るべきことと感じました。（義務としての研修でいいぐらいのことだと思いました） ・ 来た甲斐のある報告会でした。 ・ 不登校は決してマイナスではないんだよ。すべての子供たちには計り知れない伸び代があるんだよ。一人ひとりの子供に寄り添う熱い会を今後も行って欲しいです。親にもいろんな引き出しを持って行けたら子供に対しても広く接していけると思います。不登校児の親として。 ・ まだまだ私自信、勉強不足ですので、できる限り不登校や教育相談についての会に参加していきたいです。 ・ 途中で退席しようとする気が全然起きなかった。 ・ 江口先生の話、現実から見た話でわかりやすく考えさせられました。一方で、不登校の原因に家庭（もっと言えば虐待の事例もある）と、一律的にみる傾向に疑問を感じます。一般的な家庭の子が不登校になっているのが、大半ではないでしょうか。 ・ 初めてのことで勉強になりました。こうした問題があることを具体的に知ることができました。 ・ 職員の対応の大変さがよくわかる発表ではある。生徒ファーストで考える現在の難しさも感じました。 ・ 今日は素晴らしい発表とすごいシンポジウムで感動しました。 ・ 大成功でした。お疲れ様でした。 ・ 毎年とても勉強になる報告会を企画していただいていることに感謝いたしております。今後も勉強させてください。

感想	・ 後半お話し合いの内容も参考になりました。公立中学にいたので、今日校長も参加予定でしたが、来られなかったので、学校でも伝えたいと思います。 ・ 今回大変よかったので、どんどんやってください。 ・ 現在子供が学園でお世話になっております。まさか我が子が不登校になり、私立中学に通うことになるとは思ってもみませんでした。不測の事態に戸惑う中、先生方に色々と教えていただき、少しずつ安定してきているかな・・・と思います。私はまだ近くに学園があり、苦しくともなんとか入学させられましたが、できない家庭はどうすれば良いのでしょうか。やはり公立校の特例校がもっと増えるべきだと思います（しかし、京都市の例を聞いて、私学は私学の良さがあり、我が子は西濃学園でよかったと思いました）。岐阜にもできますが、遅いと思います。これだけ増えている中、社会として対応が後手に回っている感じは否めません。ぜひこういう発信をどんどんしていった、暗闇の中にいる子供や家庭を救って欲しいと思います。まずは知ることから。
----	---

令和元年度
西濃学園教育報告書
不登校特例校が拓く 日本の教育

令和2年3月発行

発行 学校法人西濃学園
印刷 (株)旭クリエイト
〒503-2124 岐阜県不破郡垂井町宮代1478
TEL 0584-23-3211